

加能連歌壇史藁草・その二（後）

——能順伝資料　その十——

棚町知彌

要旨 小松天満宮に詣ではじめて十年有半、昨年九月、十幾回目かの調査に、かねて探索中の能順自筆発句書留（零葉）がかなりにまとまって出現し、本稿への採録を許された。この資料により、元禄二年の初秋、芭蕉を案内した日よりあまり程経ぬ雨の日に、万子・生駒万兵衛が能順を訪れ、連歌が催されたことなども判明する。

北野天満宮所蔵の慶安五年・元禄十五年兩度の大神神忌万句連歌、ならびに同社古記録所載伝記資料（残り）の採録を別途とすれば、能順全集のための資料収集はここにその八割を達成したかと思う。

近世地方一連歌壇史の資料集成に四回もの紙面を提供いただいた本誌とのお別れに、本稿（その十）にはつとめて総集編的補注を加えることとする。

能順伝資料翻刻一覽

- (一) 北野学堂連歌史資料集（貞享年間）
〔近世文芸資料と考証〕 7号、昭49年2月刊
- (二) 能順伝資料・その二（預坊時代・前）
〔有明高専紀要〕 11号、昭50年1月刊
- (三) 能順伝資料・その三（預坊時代・後）
〔同12号、昭51年1月刊〕
- (四) 宗因点『延宝五年 北野三吟連歌』
〔近世文芸資料と考証〕 10号、昭53年2月刊
- △番外▽ 加能連歌壇史藁草・その一
〔国文学研究資料館紀要〕 11号、昭60年3月刊
- (五) 加能連歌壇史藁草・その二（前）
〔連歌研究の展開〕 昭60年8月、勉誠社刊
- (六) 能順時代人の連歌史観・参考資料
 (1) 二十四人連歌仙（金沢市立図書館・藤本文庫所蔵本）
〔白山万句——資料と研究〕 昭60年5月、白山比咩神社刊
- (2) 能順師北山之記（同右。神宮文庫本『歌道聞書』の別本）
〔国文学研究資料館紀要〕 12号、昭61年3月刊
- (七) 翻刻・聯玉集（乾・坤） 附・能順交遊人名索引（稿）
〔同13号、昭62年3月刊〕
- (八) 加能連歌壇史藁草・その二（中）
〔小松天満宮だより〕 4号、昭63年8月刊
- (九) 靈元院と能順

能順自筆発句書留 (抄)

〔表紙裏 左隔二〕

天和三亥 壬五月於京都

於学堂

妙心寺 龍海餞別之詩韻之

和 盟字

一 めぐりあはん盟りや時雨松の風

加州ニ下リテ

由比孫兵衛正及妻女悼

二 風さむしいかにむなしき夜半の床

本多安房守政長興行

三 松の風いく夜つもりて今朝の雪

「松風のしくれてつもる」 899

今枝内記直方興行

四月清しあまる光や玉霰

浅井源右衛門政右宅ニ而 直忠・正供

四吟

五 降にきと告しやかくて宿の雪 925

(一) もともとが一冊のものではなく、幾かたまりかの書留めが更に零葉化しているのを、年次を推定して編集した。まだまだ同類の出現する可能性もあるので、適宜十三の部分に分けて採録した。

(二) 原本未調査のまま(コピーにより) はじめの部分(1)と(3)を一つづきとして、旧稿「その二(前)」末に「能順一」として翻刻したが、このたび原本について編次を正し、中間に新出の(2)部分を挿入し、あらたな注を附して再録した。

(三) 一部は原本未見のまま、かつて谷沢尚一氏の採訪された写真によらせていただいた。

(四) 『聯玉集』(本誌11号所収)との校異を注した(ただし、表記の異同は省略)。洋数字は同集の句番号を示す。

(五) 句頭に漢数字の一連番号を附した。

△作品(後) 一—(1)▽

〔表紙 左隔二〕

天和三三年

北野学堂発句

〔天和3年閏5月3日〕

学堂月次始 法橋能在坊作代

六神松の言葉茂れ世々の陰

△注▽「壬五月三日、稽古月次会始能順被勤之。今度自

加州上京、以為連歌達道故、推而為宗匠之。則被出兼

題、学徒中不残作発句、其中以好句為其日之発句、及

脇第三、如前句付、各思案之、被加點、以殊勝句、各

被定畢。

一月次之会、同年九月迄、能順雖為宗匠、十月下向加
州也。故其已後、能通・能拜・能東、為宗匠被勤之」

〔学堂記録下書〕

西本願寺下勝満寺行誓興行

七夕露の螢にそよく草葉哉

「草葉に戦くほたる哉」 403

桔梗屋七左衛門正信興行

壬五月 387

八雨長し今年まれなる五月哉

「ことし更なる」 387

大森三郎兵衛好治興行

九風露の色にも竹の若葉哉

石河正謙興行

平岡之山庄 於更幽軒

一〇郭公山かすかなる行多哉

有馬涼及興行

二陰涼しさそ仙人の宿の松

石河正謙 北野之家ニ而

興行

三松風や聞渡るさへ下涼み

〔天和3年6月7日〕

浅井源右衛門政右妻女ノ悼

一三床夏の契も露のうき世哉

△注▽「一六世之祖母 今枝信斎〔近義〕

妹 天和三年六月七日病死仕候」

〔先祖由緒一類附帳〕

菱屋庄兵衛重直興行

一四栽残す木の間は月の砌哉

桔梗屋六右衛門正治興行

岡崎之家ニ而

一五山里やおもふによらは秋の月

菊屋理右衛門直之興行

当春家作リタルニ

二六紅葉にも心見えけり家桜 757

能作家之床ノ内ニ狩野縫殿助

松梅を多かける時 発句所望し

ければ

二七うつし絵はおもふ色そふ梢哉

玉泉寺其阿母ノ悼ニ京ヨリ

一八哀いかにおもふ袖さへ野への露

梢に色鳥あつまりたるをみて

一元色鳥の色をあらそふ木の実哉

△注▽原本は次丁・一〇五へ続くが、ここまでは天和3年、

一〇五以後は元禄3年と推定し、別群(2)を挿入する。

△作品(後) 一—(2)▽

「貞享5年・元禄元年」

桜の花盛之会ニ

二〇思ひしも此一本そ花盛 156

本多氏政在亭会

三 せき入て庭や山水山桜 234

井上氏長貞会

三 折袖や四方に散行山桜 238

瑞順・重幸三吟

三 身をよせてよいさみんいとはし花も老の陰 198

未出

二 花に風かつゆるさるゝ匂ひかな

□
×××××××××××××××
□
×××××××××××××××
□
今枝氏直方亭ニ而

三 松柏の庭や太山の初桜 226

竹田氏忠張別所之花ヲ見て

三 今日来すは花もおもはん色香哉 158

糸桜

三 誰かいはん花に染たる糸桜 253

井上氏長貞柴屋文台ヲ

写テ此発句をと有ニ

「柴屋の文台開ニ」 174

六 花の詠柴の屋残る木陰かな 174

於江沼郡山代湯本

元世の外の春をも太山桜かな

於同所三月尽

三 行春も今夜や旅の相舎

於同所

三 初花をの若葉に残する木の間哉

△注▽元禄1年3月「賀州於山代湯本」

政在・可春・能順三吟百韻「山白く」

翻刻△作品(中) 一二▽

三 花をなと若葉に来鳴郭公

本多氏政在亭ニ而月次始

三 言種の花も猶みん茂り哉 475

寺西氏直行興行

三 夏虫の夕景草や今朝の露 481

(異)は露もなし

後ニ今朝の露ト替タリ

能貨追悼

三 夏虫も人の世おしむ鳴音哉

前田左京招請ニ付

三 まねかてもとふはまし宿の花薄

「問はや宿の」 582

三 よしやふれ月は在明宵の雨 633

歛生庭ニテ

三 みたれすは露もかゝらし萩薄 561

名月

今夜△

三 迎も身は老けり今夜秋の月 692

横山氏々從亭ニ而

三 雲風の色は時雨のゆふへかな

前田半七直□亭ニ而

三 木の間より月の散来る紅葉哉

佐野寿仙亭ニ而

三 是も又木葉音する霰哉

本多主殿政在亭ニ而

三 夕月夜汀の影や薄氷

前田万助知頼亭ニ而

四 河波の声く寒し夕千鳥 988

元禄二巳元三

△62歳▽

望 命也うれしき世にも今日の春 10

本多安房政長卿古松梅アル文台

開 四吟之連哥ニ

哭 梅か香や古き風吹宿の松

鳥井に松梅書タル

御影之讚

哭 梅に匂ひ松に木ふかし神慮 29

横山氏々従亭ニ而

哭 瀬の声に添行山の雪間哉

本多氏政在亭ニ而

哭 露に見よ柳か上の春の雨

森氏三宣亭ニ而

吾 夕霞音にこそなれ夜の雨

「音になりにけり」 65

本多氏政冬亭

吾 色も香もいかに教し家桜

(改) 「外にみぬ色やおしへし」 258

佐藤治兵衛ニ而興行

吾 誰により忍ぶ初音そ時鳥

慈雲寺日祥興行

「郭公」 316

吾 思ひ入山路は知や郭公 316

「山寺の人のもとへ」 361

吾 山にても聞すはいつち郭公未 361

河合三平尹信興行

「山踏せし時 高根にのほりて」 350

吾 月になけさらは雲井の時鳥 350

佐藤儀左良成興行

吾 花よりも老は慰む若葉哉

板津久七郎直景宅ニ而

当座

毛 空吹て木の下露や夏の雨

政右別所をしつらひて始ノ会

湖水の月を

興行ニ

「粟か崎にて」 641

「新宅にて」 445

空 月出て空なる水の光哉 641

天涼しさやしつらひ栽し宿の松 445

昼静亭ニ而

生駒万兵衛被来しに

空 山窓に開き出るや四方の秋

「雨の日訪来し人に」 818

「山窓を」 774

弄雨にとふ心そ心宿の秋

十五夜

「秋の宿」 818

空 一年に月待出し今夜かな

△注▽元禄2年7月7日 能順・元胡両吟 百韻「梶の葉

「月待出る」 682

に」翻刻△作品(中)一四▽

十六夜 673

能舜大徳懐旧

空 出て月空にいさよひの曇哉 673

「能舜五十回忌」 618

会 森氏三宣

空 老か身や古き記念の忍草 618 「後出一〇七」

「葛」 619

横山氏従

空 白露に吹なす風の葛葉哉 619

空 鹿の音や山立出る夕嵐 568

湯原栄応信

粟崎より立山をみて

空 風露の荻にかたよる夕かな 590

「越中立山を遙に見て」 826

廿六日 河原兵庫

空 秋の色目にたち山や雲の上 826

「二十六夜」 674

究 またて見る月は有明の寢覚哉 674

晦日 渡部氏 寛

「二十七夜」 675

七 月もなき夜の色也萩の声

「秋の色なり」 675

本多氏政在妻懐旧

「全」「悼人のもとへ」 540

七 誰袖か露のかゝらぬ草の原 540

八日菊 井上氏長貞

「九月八日ニ」 729

七 盛待今日や限なき菊の色

「盛なる」 729

岡島氏元為亭

七 遠山や爰に木間の村紅葉 747

七 風未出ふけは月晴くもる木間哉 657

九月十五日

誓円寺三千日念仏回向之砌

「千日念仏の座にて」 668

七 紫の雲はさはらしるな胸の月

又は 雲をくぐくもはらへ

「雲はさはらし」 668

ハ注V元禄2年10月、能順上洛。11月晦日より年預頭を勤む。

」

七 しのはらや旅のうきふし村時雨

於大坂川口

「大坂にて」 835

七 難波津や今も春への神無月 835

同所九昌院ニ而

「山寺へ詣ける比」 861

七 木の葉のみ塵とは見えつ寺の庭

「塵とは見えず」 861

直之興行

七 朝霜の花に鳥鳴冬の庭垣根哉 877

素久兩吟

八 薄雪の月に澄行夕かな 914

好治兩吟

とへかしな松はみゆらん宿の雪
松は今朝みゆらん物を宿の雪

和州菅原ノ御社奉納

神祇 素久興行三吟

「古き社に詣て」

三 音すみて松風さむし神の庭 985

元禄三年元三

三 藟ニ成て

三 守すはあはまし今日か神の春 12

大森氏好治へつかはす

三 鶯や夜をほのめかす窓の竹 90

三 雨もよに曇も花のたより哉

於東山 杉間の花と云事を

三 山下風ふけは桜の杉間かな

同所ニ而枕の山桜と云事を

^ 63歳 v

三 見はやみし夢の枕の山桜

久須見常円へ遣ス

三 奥ふかき花の心や山桜

三 尋来る心を太山桜かな 231

自黙・好治三吟

三 家土産に四方の花散都かな

「朝かな」 187

「都へのほる餞別に飲生と両吟」 239

三 花毎に思ひ出へき桜かな 239 「後出二九五」

三 散行もまたれし花の心かな 178

三 言葉や人の心の春の花

三 陰高し此一本や山桜

三 人の為花は植まし老の春 197

「にし山の花見に出し人の許へ」 236

三 山土産を頼むや老の桜符

「さくら駈」 236

三 言葉や見るにまされる花の色

妙心寺桂周院龍海転位ノ賀儀

穴色そへん藤の下染すみれ草

於宇治興聖寺

推定。

賀茂にて

九 秋さへやいひし花園春の色

「加茂の岩本の社の涿にて」 499

一〇〇 宇治川や行春早し高瀬舟

一〇五 水清し岩本柏夏のかげ 499

自黙・好治三吟

初秋

一〇一 いたつらに春を古屋のなかめ哉

一〇六 萩の葉に待とる秋の夕哉

三宅氏重直夫婦牡丹を

能舜法師五十年忌

夢みて祝の心をとひひしに

「能舜五十回忌」 618

一〇三 植しうへて宿の契や深見草

一〇七 わか身こそ古き形見の忍草 「前出」

比叡山にて

「老か身や」 618

「卯月の比 大比叡にのほりて」 332

名月 大雨雷電ノ夜

一〇三 子規爰を雲井の高根かな

一〇七 人の心空なる月の今夜哉

「音を雲井の」 332

「人こゝろ」 690

小河成章母悼

十三夜

一〇四 雲となり雨の哀の五月かな

一〇八 有し夜に勝りかほ也秋の月

△作品(後) 一一(3)▽

△注▽原本所載位置は一九につづくが、以下は元禄3年分と

一〇九 おもふらん露の世いかに袖の上

浅井政右 子息以政にをくれて
愁傷をとふらふとて 九月廿七日

十月一日

二〇三冬てふ日数や今日は一時雨

〔元禄3年10月10日より、於宝円寺執行〕

微妙院殿「利常」三十三回忌

二二めぐりきぬ其夜の時雨老の袖

好治ニ而当座一二付

二三霜白き落葉は月の桂哉

素久ニ而同一二付

二三梅咲て梅春やいつはる春や神無月〔推定〕

（せ）咲や梅春いつはらぬ神無月

三宅庄兵衛重直ニ而

二四春秋の色にとられぬ冬木哉

大森好治ニ而

二五雲風の色のつもりや峰の雪

〔雨風の〕 935

△注▽能順自筆「短冊」には

「雲風の色のつもりや峰の雪 能順」

歳暮

二六身の外に思ひて暮す年もかな

辛未元旦

△元禄4年・64歳▽

二七身こそあれ心なふりそ花の春 11

好治両吟

二八梅柳風をあらそふ色香かな

比叡山ニむかへる庭ニ而

「台麓にて」 72

二九^後猶残る雪におもへは高峰哉

「雪をおもへは」 72

渡部宗堅・好治三吟一折ニ

三〇^前梅か香に雪の塵かふ袂哉

好治柴屋写文台開ニ

三三^{々々々}いかにその詠いかに柴屋の山桜

於仁和寺

三三いつれ雲大内山の山桜

三三散花を見は山寺の夕哉

梅宮ニ而

二四 桜花咲継梅の宮居かな

北国ニ下向 山中ニ而

能美屋太郎右衛門一茂興行

「蟬」 416

二五 行心花にしたかふ山路かな

帰山ノ辺ニ泊りて 三月尽

二三 蟬の音に戦く露散木陰哉 416

本多政長卿興行

二六 我もさはいさづれなん春の帰山

宗祇像開 歎生興行

二三 陰に守氷室や同じ松の雪 502

本多政在卿

「祇公墨蹟開」 346

二七 世々に聞名もいや高し郭公 346

政右山代入湯之時分 云遣ス

二四 露をおもみ風待あへぬ蓮哉 428

長瀬湍兵衛

「山里人のもとへ」 326

二八 山里の伝たにゆかし郭公

「伝たに嬉し」 326

二三 螢さへ添て玉飛泉哉

「つれて玉とふ」 407

九津屋次郎右衛門了武興行

二九 白雲を雨の五月の光かな 384

今枝氏直方娘ノ悼

三〇 露を袖の名残に消し螢

牧屋久兵衛正幸興行

二七 白露をあつめてこほす蓮哉 427

前田知頼

二八 瀬の声は秋風近き夕哉 510

月次始 政右

三三 影見えて取とめぬ風の螢哉 402

「政右の許にて月次会始ニ」 455

三 茂れ猶言の葉風の下涼み 455

慈雲寺

一四〇 常盤木の下露涼重し夏の雨

(参考)「山寺にて雨いたふ降ければ」

太山木の下露寒し夏の雨」 503

湯原応信

「扇」 434

一四一 取とめぬ風ならなくの扇かな 434

板津直景

一四二 絵にかけは草木も風の扇哉

「草木の風の」 436

夕白さけるあたりにて

井上長貞

一四三 夕白のはつかしけなる小家哉

正□両吟

一四四 身にそしむみぬ色ふかし秋の風 775

長瀬善右衛門

一四五 さ夜更て月しつまる影月や荻の露

宮丸や成正

「槿」 612

一四六 朝日は露の花なる匂ひ哉 612

安房殿ニ而

一四七 一村に千種もなひく薄哉 579

半田五郎左殿悼

「北野松梅院尚禅の悼」 811

一四八 稲妻の影にしほるゝ袂哉

「露をとゝむる」 811

天神講御作代

「北野桜葉の宮の月次ニ」 756

一四九 桜葉の宮居時めく紅葉哉

「宮井ほのめく」 756

名月 678

(改)より出し

一五〇 今夜月秋を出ける光哉

「月今夜秋を出たる光哉」 678

湯原氏応信ニ而

一五 峰の月汀まされる光哉 642

一五 白露に虫の音清き小篠哉

踞道ニ而会

松田助左衛門ニ而

一五 染るのみ色か草木の秋の風

一五 一本に秋や庭もせ花薄

会

浅井氏政右悼

一五 朝霧の花に晴行野風哉

「悼人のもとへ」 536

「花に成行」 601

一五 袖しほる外なき露のうき世哉 536

会

「浅井政右の悼」 815

一五 空にこそかよふ心也けり月の友

一五 なれし世や恨にかへる老の秋 815

十三夜

△注▽元禄4年間8月10日「素庵懐旧之連歌」独吟百韻

一六 望月に光あらそふ今夜哉 743

「馴し世や」翻刻

△作品（中）一五▽

政在卿ニ而

同会ニ

一六 秋風の月は時雨の雲間哉 651

「浅井政右の身まかり給ふ悼ニ」 534

湯原源七ニ而

一五 玉よはふこたへや化し袖の露

一六 松の葉をもとかしけ也蔦紅葉 786

「こたへもあたし」 534

慈雲寺ニ而

金沢ニ而、清持・既白三吟

一六 鹿の音の薄に残る山田哉 571

「木場といふ所の江のほとりに

十月朔日 中黒六左衛門ニ而

たれかれ誘ひ出て 月見し時」 642

「時雨」 838

二五 夕暮の□冬も来にける時雨かな 838

坂倉助太夫懷旧息善助興行

二六 とふ道や木葉にふかき苔の下

林助左衛門興行

二七 霰にもあらそふならの枯葉哉 891

奉悼清山大姉

「京にて慈母身まかりしにも

えあはず 小松にて」 862

二八 はゝき木よそに別る落葉哉

「あはてむなしき」 864

△注▽元禄4年10月5日 能順・瑞順両吟百韻

「はゝ木ゝのあはてむなしき落は哉」翻刻

△作品(前)一〇▽

誓円寺 「元禄四年十月五日

過去帳に 浄室清山大姉

梅林院能順母

二九 昨日みし遠山風や今朝の雪

元禄五壬申年元三

△65歳▽

三〇 老をこそおもふ事には今日の春 14

岡島元興

三一 薄雪に見る／＼露の柳哉 101

三二 竹の葉に梅か香戦く垣根哉

岡島伝蔵

三三 山の端やしのおめまかふ春の雪 73

横山外史

三四 いそげ花遠ざかり行峰の雪 151

今枝直方

三五 紅に咲こそうつれ梅花

月次 浅加治卿

三六 待初る心の奥や八重桜 241

湯原応信

三七 白露や緑すくろの村薄 116

生駒万兵衛

三八 花の中に花咲出る桜哉 227

△作品(後)一一(4)▽

林助左衛門

一六 花といへは先おもはるゝ桜哉 232

高岡慈雲老父悼

一七 袖の色や堅野のかたみ夕霞

一八 白鳥の枝や氷し玉柳 110

本多安房殿江戸下向 主殿々

より懐紙可被贈ニ付

一八 咲花も春のもとたつ東かな 147

三 吟

「政右・直忠三險」 140

一九 有明は夜な／＼霞む行ゑ哉 140

△注▽元禄5年1月18日「何船」百韻

「晨明の」翻刻

△作品（前）一一▽

待人の遅く来れるニ

一三 散にけり問来る人の遅桜 268

佐藤儀左衛門良成悼

一四 花をさへ見果ぬ夢の恨哉

高島源蔵友徳会

一五 花盛霞も風も匂ひ哉 149

井筒屋庄兵衛一正興行

一六 露落て色はかほかぬ若葉哉 299

塩屋長右衛門祐以興行

一七 聞ましや今幾日有て郭公 345

半田氏正好家尉祝詞

一八 植し世の根さし木ふかき若葉哉 298

政在公ニ而

一九 雨に今日とはすはいつの時鳥 319

「若楓」 309

二〇 夕暮のや秋やは朝露若楓

田上屋昌忠興行

二一 河音につもるや雨の五月山

「川音の」 386

半田氏正好四吟

二二 五月雨の空たのめなる晴間哉

横山氏隼人殿ニ而

二三 涼しさの月にもり来る木間哉

竹森校春秋林興行

一五 荻葉をこほるゝ露の始哉 589

如鉄三十三回忌 脇田七兵衛

興行 七月十九日

一五 手向にもつむや其世を忍草

八月朔 能州へ趣テ

一宮ニ奉手向

「一とせ能州一見にめぐりし時

一宮にて手向」 827

一六 松杉や神の太山木世々の秋 827

阿部屋の浦 828

一七 松原の秋や塩屋の夕煙 828

福浦の磯 829

一八 秋風や爰に入ぬる磯の松

「音に入ぬる」 829

黒崎の磯 831

一九 秋風の波のあら磯岩もなし 831

深見の滝

二〇 山高し雲間霧間の滝つ波

「深見か浦」 830

二一 立田姫おしむか染ぬ滝の糸 830

惣持寺 832

二三 夕暮や秋より外の太山寺 832

乙ヶ崎

二四 磯の上かたらん松の秋もなし

七尾

「能州七尾にて」 723

二五 此うらと雁も来にける渚かな

「此浦に」 723

「おなしく七尾にて」 549

二六 朝霧に島はうかひて波もなし 549

今浜

「能州今浜にて」 599

二七 浜荻や爰にこたふる興津なみ 599

半田氏正好興行

二八 深緑松にあつまる冬野哉 984

岡島氏一重興行

「霰」 889

三〇 篠の葉の霰をこほす霰哉 889

岡島氏元興々行

三〇 句へ梅誰春ならぬ神無月

三〇 さ夜更て霜にしつまる木葉哉 859

三二 冬枯の色にかたよる薄かな 870

竹田氏忠張関東より帰宅ノ刻

「友の尋来しニ」 953

三三 待来しや言葉つもる雪の友

「待えしや」 953

渡部氏寛庭をつくろはれたるニ

三三 松を植て今朝こそ庭に峰の雪

「松を置て」 905

高島氏友徳興行

三四 月と雪いつれくの光かな 919

三五 有明の光や幾重今朝の雪 907

前田氏知頼ニ而

三六 音絶て色に成行曇かな

直忠ニ而三吟

三七 明ほのゝ白きかきりや月と雪 918

安房守殿御母上十三回忌

「南昌院殿十三回忌」 947

三八 淡雪のあはれ木ふかしうなひ松 947

三九 空晴て松より出る雪吹哉 980

多賀信濃殿始而会

三〇 猶とはん道つけ初つ雪の宿

「跡つけ初し宿の雪」 954

多賀与一右衛門殿会

三三 つもれ猶齡木高き松の雪

生駒氏正信息女悼

三三 淡雪の哀にぬるゝ袂かな

森氏三宣亭ニ而

三三 埋火はうはの空吹嵐哉

「埋火の空ふく小夜の」 991

「

「

「

元禄六酉元三

△66歳▽

三三 忍音やしのへとてしも郭公 323
坂倉善助

三三 今朝よりやおもひ初るを花の春

「けふよりや」 13

三三 行人は見ざらん花の夕哉

三三 花の香に心時めく夜床哉 191

花を見ありきて

三七 目うつしも花より花の盛哉 150

横山外史御内方遠忌

三六 散花は其世なからの別哉

三元 行春を待そまたれそ藤の花 275

未出

三〇 春の色は藤山吹のかぎり哉 273

「藤山ふきを」 273

「暮 春」 279

三三 行春に見えん心の色もかな 279

本多政在

三三 たをやかに露そかゝれる若楓 311

三三 打乱篠のくまなき蛩哉 409
今枝直方忌中ヲ訪

三三 ぬれ／＼ていかに日暮す夏の雨 489

「今枝直方の忌中に籠らせ給ふニ」 489

三三 慈雲寺閑居日祥会

三三 夏山は木のもと住の心哉 488

「金沢慈雲寺日祥隠居せし会」 488

三三 浅加十郎右衛門一男悼

三七 行蛩やみなる空を名残哉 415

「悼人のもとへ」 415

三三 直方下屋敷ニ而

三三 夏草の中なる声や松の風 486

「五月雨」 381

三三 五月雨に降出る空か朝曇 381

日祥・元胡三吟

「梅 雨」 389

二四〇 をのつから木の下露や梅雨 389

佐々木伊織

二四一 橋の露は涼しき匂ひ哉

青山将監

二四二 長き根は汀ゆかしき菖蒲哉 373

正甫祖

二四三 せき入て蛸も庭の清水哉 408

応信賽ノ会

△作品(後) 一—(5)▽
原本未調査、谷沢尚一氏採訪の写真による。

二四四 夏ふかし言葉守の神慮 496

津田孟昭下屋敷蓮池

二四五 水こもりの下はえならぬ蓮哉 430

浅加十郎右衛門子ニをくれて

こもり侍比

「悼人の許へ」 492

二四六 花になせ心のうさを忘草 492

多賀信濃下屋敷

二四七 海見えて遠く涼しき木の間哉

佐々木定堅息祝儀

「小児を祝する事有家にて」 458

二四八 生行ん小松や世々の下涼み 458

横山弥平次

二四九 松風のかよふや蟬の下涼み 417

二五〇 夏虫の影やゆきかふ秋の露

知頼 「秋の水」 482

二五一 夕立の露やかたへは秋の庭

「露やかたへの」 441

横山筑後悼

「六月廿九日 身まかりし人の悼ニ」 508

二五二 露の世は秋より先のあはれ哉 508

名月

二五三 今夜にも見さりし月の今夜哉 698

二五四 そはたてる枕は雁の雲井哉 707

二五五 山もあれと花よ紅葉よ野への秋

「山はあれと」 778

三 吟 直忠・元胡

二五 夜は長し手枕疎し月もかな 671

本多伊織殿悼

二五 風の上の世をおとろくや荻の露

二六 苔青き爰や梢の秋の庭

「秋の色」 788

応信興行

二六 薄くこき梢は霧の紅葉哉 547

孟昭下屋敷ニ而

二六〇 澄にけりかくてそ月の秋の水 638

十三夜

二六一 半をもおしまさりきや秋の月 738

半田正峰祖^々飛州高山饒別

「半田正祖の飛州へまかり

給ふ饒別に」 772

二六三 秋そ行よしさは待ん春の空 772

政長興行

「雑」 976

二六三 松風や時雨降をける今朝の霜 976

政在梅か枝文台開

「本多政敏朝臣の亭にて

梅か枝を蒔絵しける文台開ニ」 962

二六四 梅か枝は花の常盤か冬の陰 962

二六五 山晴て木葉時雨る川瀬哉

長質亭ニ而

二六六 雪時雨山見かくれの夕日哉 978

直方下屋敷にて

二六七 さそふなよ散とも風の下紅葉 857

応信ニ而

二六八 霜に置月に澄夜の嵐哉 884

後藤治右衛門興行

二六九 雪の色も其さま／＼の梢哉

定連一子悼

「高島定連の息うしなひし悼ニ」 892

二七〇 袖の上にみしやはかなき玉雹 892

正勝老母悼

三〇一 淡雪をみてもおもはんうき世哉

元興ニ而

三〇二 埋火にかたふく程や春の夢

柴屋写文台開

中黒秀基「基」興行

「柴屋の文台開ニ」 940

三〇三 柴の屋に跡はとまりぬ雪の道 940

正供悼

三〇四 人の世はかへらぬ年の名残哉

武康ニ而一折

三〇五 月雪の空へも年の名残哉

三〇六 冬籠たへすやは末片枝梅の花

「堪すやはすゑ」 961

孟昭ニ而一折

三〇七 雪の内の松吹出る嵐哉 930

「横山氏従の亭にて」 974

三〇八 身の外にゆかはおしまん年もなし 974

戌歳 元旦

△元禄7年・67歳▽

三〇九 しのゝめにみるや来る方春霞 15

津田玄番殿

御影開 心たにの哥あり

「梅」 28

三〇〇 まもりけり神風匂ふ梅花 28

伴八矢殿

三〇一 梅か香はうれしき風の便哉 40

三〇二 雪うすく霞ふかむる外山哉 66

山崎庄兵衛殿

三〇三 白露の枝うつりする柳哉 106

歓生

三〇四 遠近の雪や村山村霞 77

三〇五 さ夜中にしらめる空や春の月 136

菊地十六郎殿 薄蔭絵

文台開 孫子祝詞

三〇六 白露の角くみ出る薄哉 117

政在卿

二七 鶯の枝と成ける柳哉

「枝と成ぬる」 108

二八 遠山の雪間や増る瀬々の声 74

二九 梅か香や嵐の内の薄霞 33

三〇 風を呼うそふく梅の匂ひ哉 49

今枝民部殿

三一 夕やみや匂ひにむかふ窓の梅

「宿のうめ」 39

竹田忠張妻女悼

「悼人のもとへ」 294

三二 春の夜の夢にみなせるうき世哉 294

同忌中ニ

三三 四方の色や霞にこもる宿の春

「窓の梅」 31

元為ノもとにて

三四 花に誰とはさらましや宿の春

歛生ニ而

「都へのほる餞別に歛生と両吟」 239

三五 花毎におもひ出へき桜かな 239 「前出」

三六 明日は花よし有とものおしき夕かな

上京ノ時

「餞別の会ニ」 189

三七 旅衣立うき花の情哉 189

「都を出る比」 190

三八 爰もおし行んかしこも花の時 190

三九 花の色は人の心のかきり哉 181

「越前帰山にて」 248

四〇 ともに春いさ桜とてや帰山 248

素久・好治三吟

「年経て都にのほり 旧友にあひて」 266

四一 遅桜あひみる老の命哉 266

松梅院禅覚興行 十九歳なれば

「若き人の連歌執心の会ニ」 312

四二 今よりのゆかしき色や若楓 312

□道所望 当座 和漢

三〇二 待るゝやいかに遠山子規 362

豊島小十郎篤宜始て

訪来しに

「大坂豊島篤宜始て訪来しニ」 347

三〇三 とはるへき里かは嬉し郭公

「宿かは嬉し」 347

三〇四 待えしは契有けり郭公 328

山里にて

「山里を訪て」 494

三〇五 山里は夏こそことに木々の陰 494

三〇六 山に住心の奥や夏の陰

みん影も今幾日有て五月闇

三〇七 音ふかし木の下露の五月暗

「木の下露や」 495

本多虎之助長直悼

「元禄七年五月頓死」

三〇八 夏虫の光ややかて袖の露

六月 七回忌

蓮池能貨大徳

三〇九 したひみる其方に涼し空の月

於光円

三〇〇 夏は風さやけき竹の台哉

四 吟

三〇一 秋風はふれすて近き夕哉

「秋風のふりすてちかき」 511

七月朔日 時鳥を聞て

「七月朔日 北野の森に子規の

啼をきよて」 776

三〇二 残れるや立かへり秋のや初声初音の子規 776

同七日御手水ノ御神事

「七月七日 北野御手洗の神事ニ」 799

三〇三 仰てもけふ御手洗や天河 799

「けにみたらしや」 799

三 吟

三〇四 風の色さま／＼秋の草木哉

三〇五 萩の露あらそふ風の宿り哉

中院通茂卿ニ而可被有頃

三六 かきりなき風の匂ひや秋の花

竹内三位殿ニ連哥ヲすゝめて

「竹内三位惟庸卿へ連哥すゝめて」 602

三七 三種の花世にちらせ秋の風 602

△作品(後) 一―(6)▽

佐太天満宮手向

「河内国佐太天宮法楽」 606

三八 神におもふ手向は花の千種哉 606

住吉ニ而

「摂州住吉の社法楽」 823

三九 住吉や神代の秋も松の風 823

「於墨吉」 634

三〇 月をきて春とやいひし秋の海 634

名 月

三一 大かたの秋さへ月の今夜哉 683

勘解由小路三位殿ニ而

「左中弁なる字ひする人の御許にて」 791

三三 さま／＼の色やあつまる窓の秋 791

樋口以洗 五条ノ家ニ而

三三 うちそひぬ衣雁か音四方秋の空風

「擣そへぬ」 711

平岡ノ道すから

「平岡といふ所の道すから」 748

三四 行山路暮なほ照せ下紅葉 748

山道にて萱草おりそへて

三五 菊紅葉いづれかいづれおもひ草 800

三六 紅葉々も菊に匂へる山路哉

「紅葉さへ」 766

日吉に詣て

「日吉のやしろにて」 751

三七 をしなへて影は日吉の紅葉哉 751

江州しのはら

「於玉川」 559

三八 玉川や錦を洗ふ萩か花 559

暮秋の比 旅立とて

三元 行秋の心もかへり都かな

江州しの原にて

「近江路にて」 977

三〇 しの原の風や朝霜夕時雨

「しのはらや風のあさ霜」 977

△作品 (後) 一—(7)△

老曾森

「近江路にて」 873

三二 冬枯を老曾の森のすかた哉 873

山路を過るとて

三三 こきませに木葉時雨の夕日哉

「時雨木葉の」 840

帰山

「帰山にて」 906

三三 雲や今朝雪降置て帰山 906

山崎庄兵衛にて家人山崎作右衛門家ニ

招請遣し時

三三 松をみて人こそ来ませ宿の雪 928

半田正祖にて

三五 おもひ来し風の行ゑや今朝の雪 901

忠張にて

三六 雪の底に鳥鳴竹の垣根哉 952

浅加治卿にて

三七 雪戦き竹葉露けき曇哉 982

菊地武康宅ニ雪の夜各

あつまりて

三六 月雪に明るもしらし今夜哉

冬 雁

「芦に雁を画る屏風に」 981

三六 居る雁の心も雪の芦辺哉 981

伴氏長治ニ而

三六 埋火は夜長きのみや冬の床

青山氏長玄宅ニ伴長治ヲ

誘引之刻

三六 陰もよし雪に立よれ宿の松

前田氏季□にて

三三 梅に春立休ふか年の内

今枝直方江戸下向

餞別

三三 行年や今帰り来む宿の梅

三三 春立てぬ行をくれける今年哉

三三 降まゝにゆき暮しける今年哉

乙亥 元旦

△元禄8年・68歳▽

三三 春の日のいてそよ更に朝霞 16

渡辺寛宅ニ而

三三 梅咲て草かうはしき汀哉

廿五日

「半田」正祖宅ニ而 神祇ノ心はへを

「同じ時 一日千句第一」 52

三三 梅か香やあふけは空に春の風

「あふけは天津」 52

伴氏長治ニ而

三三 鶯も梅咲竹の籬かな 41

元禄九丙子年元三

△69歳▽

三三 花鳥に心つく日のはしめ哉 17

今枝民部直方

三三 薄曇雪も猶ちれ春の月 132

三三 風露におもひみたるゝ柳哉 99

「於帰山」 122

三三 雁も今有とや爰に帰山 122

山中を越て

「旅行の比」 78

三三 雪に越て更にも春の山路哉 78

「湖海のほとりにて」 130

三三 夕霞月のにほてる海へかな

「月もにほてる」 130

難波にて

「難波津にて」 256

三三 難波津の花はに咲や生駒の高峰哉山桜 256

今宮の山ニ而

三三 風の色にうつるふ花の夕かな 184

佐藤儀左良重母悼

三三 おもひやる空や霞の袖の雨

嵐山にて

「嵐山にして」 249

三三 山桜吹や嵐の麓川 249

花の夕

三〇 花の色は散に尽せる夕かな 176

山里ニ而

「山里人のもとにて」 235

三二 爰に咲心やふかき山桜 235

能東坊賀ノ時

「六十の賀しける人のもとへ」 286

三三 けに永し祝はん日也老の春 286

「山吹」 276

三三 山吹やけにやへくの春の花 276

三四 有明やおもひ馴にし郭公 339

(改)時鳥 (改)寝覚哉

三五 徒に幾夜明しつ子規 340

三六 忍ふなよとても立し名子規

「紙屋川のほとりにて」 413

三七 紙屋川つゝみあつむる蛍哉 413

(至)興行

三八 袖にふけいまた梢の秋の風 509

三九 秋の色やまた薄霧の朝しめり 542

(改)梢哉

三〇 有明も今三ヶ月の夕哉

(改)はしめ

「元禄9年秋より元禄11年7月まで欠」

△作品(後) 一—(8)▽

△元禄11年・71歳▽

宗祇法師忌月会始

「祇公忌日月次の会初二」 613

三三 朝かほの残るや人の世々の秋 613

△注▽北畠宮司家に伝来している能順自筆の当百韻写本(巻子本)により次稿に翻刻紹介する予定。北野宮仕ばかりのこの催しに、能順は特に惠乗坊快全を参加させている。

随吟五七日手向

「仵」悼人のもとへ」 538

三三 袖の上の露や心の手向草 538

袖しほる共

惠乗「快全」上京ノ時

「越路よりのほりける人を待悦て」 712

三三 告て来し初雁うれし秋の風 712

三三 初雁や告てさそひし秋の風共

惠乗・好治相伴 東山辺ニ遊テ

「快全・好澄三吟ニ」 725

三三 身にもなせ草木の老は秋の色 725

(区)をそおもふ

那波氏祐英ニ而

「雨の日 むかひに人を来しけるニ」 667

三三 雨にもそとはんとおもひし宿の月 667

名月

三三 身の上につもれる月の今夜哉 700

「菊」 726

三三 白菊のあまれる色や色やあまりて

>>>>>>>>

今朝の露

「今朝の霜」 726

十三夜 737

三三 見つゝ月おもひくらふる今夜哉 737

竹森検校興行

三三 紅葉々や千入に匂ふ菊の庭 765

三三 有明のうつりも行か秋の色

「有明に」 661

平岡ニ而

「山里にて」 759

三三 紅葉々も入にしたかふ山路哉 759

十月朔

三三 神無月としてしも今朝の時雨哉

「さてしも今朝の」 837

三四 雪までと色を残さぬ梢哉

「色に残さぬ」 944

「霜」 876

三五 朝日影匂ふや霜の花曇 876

三六 神松に降初し雪や手向種 900

三七 月影や氷て残る今朝の霜 878

三八 雪に月おなし雲井の高根哉

三九 年を捨ていさまでまたはや迎老の春

「またれんとても」 967

元禄十二卯年 歳旦

△72歳▽

三〇 道しあれはたてるや万四方の春 20

三一 薄雪や梅に匂へるうす朝霞

三二 青柳よ風にしらすな今朝の露 97

三三 梅か香や手枕うときし夜半の月 56

「越路へ行人のもとへ」 125

三四 雁そ行いかにゆかしき越の春 125

三五 雨は今朝緑に春の野山哉 291

二月廿四日 奉幣之手向

「神 供」 146

三六 神も此幣は見そなへ花の枝 146

佐々木氏定堅娘悼

三七 若草に干かたき露の袂哉

「花」 142

三八 夜の雨やかくこそ花の朝霞

「花のあさ露」 142

三九 うるはしく雨やかしつく花の露 153

四〇 花の色はよしや吉野も嵐山

真如堂のほとりにて

四一 木のもとに世を尽さはや山桜 230

四二 花に鳥白雪こほす羽風哉 188

△作品(後) 一一(9)▽

嵐山

四〇三 見て暮せ明日は嵐の山桜

「めてくらせ」 250

「大井川にて」 210

四〇四 筏士や花に棹さす大井川 210

「神前にて」 243

四〇五 かけ初てし心のしめや八重桜

「懸初て」 243

於智恩院

四〇六 たのしみを極る花の盛哉 209

於祇園 208

四〇七 花の色もむへなる神の園生哉

「花のいろむへなる神の」 208

於清水寺 207

四〇八 滝の音は花に落来て水もなし 207

四〇九 散花や又山風の一盛

万日念仏之場ニ而

「万日念仏の座にて」 171

四一〇 花に人人と花迎もらさぬ色香哉

「花に人」 171

八重桜

四一一 かけ初し心のしめや八重桜

「かけ初し心のしめや八重桜」

四一二 花に人人と花むかへもらさぬ色香哉

「花に人人と花むかへもらさぬ色香哉」

四一三 手向つゝおもふも花の台かな

妙光院尼悼

「あねの尼に成有けるにおくれて」 219

四一四 身やしはし残れる枝の花の露

「身や今年」 219

相国寺慈照院 親父遠忌

法事ニ 三月四日

四一五 手向する心や色香法の花

四一六 時鳥初音や雲井夕月夜 333

妙心寺 大通院にて

「禅寺にして」 487

四五 柏樹や爰に木ふかき夏の庭 487

素閑居士十七回忌 七月十六日取越

「懐旧の人の許へ」 315

四六 ぬれてつむ袖やあな卯の花の露 315

「やことなき人の許より 嬉しき

事あまた有つる謝礼の心はへニ」 456

四七 袖に風あまるかや松の下涼み

「袖にふけあまるか松の」 456

四八 取とめぬ風に行ゑや飛雲

四九 夕立はかたへ涼しき雲井哉 440

「忍草」 614

四〇 下露やまた秋風の忍ふ草

「しら露や」 614

四一 清き瀬や心の麻のゆふ被 468

御手洗水之時 六日

四二 むすふ手や清く涼しき秋の水

（水）をのつから涼しく清し

四三 天河今夜水なき空もかな 518

自得能重大徳十七回

四四 哀おもふ秋は一村薄かな

四五 夕月夜初雁近き雲井哉

「雲まかな」 710

四六 月出て月雁待かほの高根哉

「出て月」 714

亡父廟參之時

「亡父能舞廟にまいりて」 529

四七 露はかり袖に残れるむかし哉 529

薄

四八 秋風や打出る波の花薄 577

中秋雨天 大風 夜更鎮り

月少見えたり 好治来入相

かたらひ 夜更ぬ

四九 もらせ雲つゝむへき名か秋の月 684

本多主殿政道家老ニ

相被加祝詞

「家相統すへき人の祝言に」 822

四〇 吹そふや松に千秋の家風 822

△注▽政敏、初政在 安房守、初主殿。元禄十二年部屋住知
三千石、列老職。同十四年政長隠居、家督無相違、名
改安房。叙爵ハ同十五年也。
(当邦諸侍系図)

清水寺ニ而

「於清水寺」 630

四一 峰の月滝に落来る光かな 630

萩

四二 花散てにみし色は露も下葉の小萩哉

「はな散て露も下葉の」 553

十三夜

四三 我国の物や今夜の空の月 740

四四 鴉鳴て梢の秋の夕かな

(き)秋 梢

「秋の木末の」 795

十三夜

四五 我国の物や今夜の空の月 「前出」

「秋の月」 740

廿一日 御作代

四六 秋は猶ありとや爰に遅紅葉 755

祇公掛物開 半田正房所望

「祇公墨蹟開ニ」 783

四七 言葉の色香や千入や染し筆跡 783

(き)や千入に

△作品(後) 一—(10)▽

嵐山にて 壬九月十六日

「嵐山にして」 760

四八 河水やあらしの山の(下葉) 760

同時

「嵯峨野にして」 580

四九 野は枯て薄計や秋の風 580

帰るさに月をみて

五〇 月出て山のかひある紅葉哉 761

「木 枯」 863

五一 木枯の尽して松の嵐かな 863

四一 松風や爰に時雨の相舎 846

(改)是も

四二 降初てつもらは幾世松の雪

四三 また来し遠山幾重今朝の雪 903

「友の訪来しニ」 950

四四 凌き来てし心ふかしや雪の友 950

四五 また来て今そ心も雪の友

四六 さ夜嵐おとろく雪の朝戸哉 910

四七 雪晴て月に雁鳴雲井哉 920

(改)月 (改)雪

「年内立春」 963

四八 行と来と先あふ春や年の内 963

四九 はしむとてしはしとまるいさよふ
~~~~~

年もかな

元禄十三庚辰年

△73歳▽

歳旦

四〇 此国や光和く日のはしめ 21

若菜

四一 梅か香の若菜に匂ふ袂かな 43

四二 淡雪や柳の糸のかた結び 100

本多安房守政長□

杖国の年を祝て

「本多政長朝臣の七十に成給ふ

年の賀に鳩の杖に添奉りて」 284

四三 千年をも経よ七かへり老の春 284

横山外記氏従七十の齢を

賀して

「横山氏従の七十の賀に」 285

四四 まれに猶あひみよ松の花の春

「老のはる」 285

(マて) 光韶卿ニ而 「勘解由小路韶光」

四五 見るのみに心は花の色もなし 160

四六 雨晴て夕をかへす春日哉 287

四七 花の色にかくろひ行か今朝の月 143

哭一 □□□桜色の風青み行梢哉 229

哭二 藤波の越るや春の末の松 274

後藤勘兵衛庭をみて

哭三 山吹やけに言葉も岩つゝし

相国寺  
縁西堂慈照院对馬餞別

哭一 別るとも月日そ早き後の春

哭二 今日のみや春の初音の子規

「飲生と両吟ニ」

哭三 問とはす手枕うとし郭公 356

哭四 鵬老のさちなる寢覚哉

「老のさちなるの」 342

樋口永甫ニ而加州衆

茶湯

「相やとりせし事侍て」 388

哭五 五月雨の古事かたれ相舎

「ななき日かたれ」 388

前田清八直忠悼

「前田直忠身まかり給ふ悼に」 398

哭六 おしめはや短き人の夜半の月 398

哭七 月を待夕や雲の下涼み 459

哭八 春をはおしみ秋はまたれて夏もなし

「春を<sup>々</sup>おしみ」 466

「御 破」 467

哭九 茅の輪をも越るや幾瀬老の波 467

(改し)

立 秋

「七月朔日」 512

哭一〇 秋立てといへは月待初る夕かな 512

七 夕 513

哭二 月もあれと今夜は星の光哉 513

八月八日 亡父能舜大徳六十年忌

哭三 したひみる程や雲井の西の月

中 秋

哭四 久かたの中の一木や花盛 694

哭五 今夜とはおもへとあやし秋の月

「おもへと<sup>々々々々々々々々</sup>今夜はあやし」 688

仮遷宮の時

四七 うつります影や榊葉の今朝の月

寢覚に

四八 明日待寢覚はつかしさ夜時雨 839

松梅院禅珍遠忌

四九 しのふ世や雪としつもる夕詠

庚辰十二月廿五日 従

仙洞様唐大御硯并御綿拝領

同廿八日 立春ニ献上

「元禄十三年臘月廿五日／上皇老折の身を憐み

思召て／梅花硯といふ御硯に綿二屯／賜る 翌

廿六日立春なりければ」 965

四六 年の内の春日かしこき光哉 965

辛巳歳旦

△元禄14年・74歳▽

「従仙洞恩賜の硯の心を」 22

四九 今朝知や筆の海より春の水 22

（改）知や今朝取筆の海春の水

四〇 おほる夜を先三ヶ月の雲井哉 141

四一 梅散て草かくはしき垣根哉 44

四二 青柳に吹すは春の風もなし 104

風早前中納言実種卿七十ノ賀

四三 経てもへんよ猶まん／＼の年の春

四四 鶯の音やは笛竹の籬かな 89

（改）鶯を

千句第一

「同じ時 一日千句第一」 52

四五 梅か香や仰けは天津春の風 52 「前出」

二月廿四日

四六 花の香は目に見えぬ神の真哉

龍安寺大珠院忠首座

住寺祝詞

四七 松の花爰にこそ見め寺の春

同所ニ而 水辺花

四七 底みえて水影ふかし花の色

「水景清し」 157

同 雨中花

四八 花の色の夕栄久し春の雨 180

勘解由小路三位殿の家にてに

柳糸桜ならへて被裁たる

花の盛に風早中納言殿

御所望

四九 くみするやともに柳の糸桜

正遷宮

「天神遷宮ニ」 145

五〇 花清しうつります覧神慮 145

八重桜

五一 咲おもれ枝は折とも八重桜 242

越中高岡 渋屋六右衛門周方

興行

「京都にて田舎人の興行ニ」 281

五二 行名残都をおもふ春もかな

「みやこ思はん」 281

勘解由小路三位殿ニ而

五三 つれなしやおもひ捨てれと時鳥 353

五四 徒に雨な過しそ子規 320

玄道所望当座

五五 村雨のふりはへ来なけ子規

「ふりはへてなけ」 322

樋口永甫方ニ而一折に

五六 名残とやかほる風吹梅雨 391

雲 峰

五七 白雪のあやしき峰や夏の雲 506

(さ)花白く

初秋風

「萩」 588

五八 萩の葉にうつれはかはる扇哉 588

祇公二百年 千句巻軸

「元禄十四巳天七月廿九日は

祇公二百年忌手向の千句ニ 732

兜 世々をふる玉の光や菊の露

「世々に経る」 732

好治にて一折に

五〇〇 一本にみるや千種の花薄

「秋のかせ」 608

此心前にも有之 失念如此

中秋

五〇一 雨に月待も明さん今夜哉

五〇三 あらはれぬ又紅葉にも初桜 754

太山木の其梢とも分ねとも

桜は花に頭れにけり

能悦五七日手向

「懐旧」 611 「悼ニ」 817

五〇三 色そなきしほるゝ袖の手向種 611・817

勘解由小路三位光韶卿息下上

千世丸殿追薦 八月廿一日忌日

五〇四 白玉や碎て袖の上の露

越中高岡 吉野屋六右衛門之春興行

「おなしくのほりし人の興行ニ」 713

五〇五 わたれ雁いかに海山越の秋

「かたれ雁」 713

△作品（後）一—(11)▽

重陽

五〇六 世々の露いかにつもりて菊の洩

々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

十三夜寝覚ニ秋の雨夜の

心を

五〇七 月もよしおもはし秋の夜の雨

西三条殿前大納言実教卿

追薦 十月十九日忌日也

「三条西殿かくれます時」

874

五〇八 いへはえに言葉枯し恨歎かな

「言の葉枯る歎き哉」 874

五〇九 吹暮ぬ明日の初雪松の風 911

壬午 正月

△元禄15年・75歳▽

五〇 あら玉の年のをゆらく朝かな

脩竹斎新造

「七十に成ける人の新宅にて」 463

五一 かりの宿たのしめ松の下涼み 463

名月

「快全・好澄三吟に」 697

五二 たゞ今夜老の僻目の月もなし 697

「薄」 574

五三 一村や秋の千草の花薄 574

九月尽

「暮 秋」 768

五四 心行秋の限のゆふへかな 768

初雪

五五 雪は今朝朝日に晴る高峰哉

「明るに晴る」 909

五六 松(カ)か枝の手向色そふ紅葉哉

武康閑居へ

「人の閑居(マ)につはしける」 960

五七 かたらひて冬籠れるや窓の梅 960

五千丸髪置祝詞

「孫の五千丸髪置の祝詞」 983

五八 霜雪もいたゞきまつれ神の庭

「雪霜を」 983

「一丁空白」

癸未 元旦△元禄16年▽ 上表翌年七十六歳

「冥加にかなふ事あまた有ける後

北野の社の預りをゆつり退て」 24



五九 おもふ事何か都の花の春 24

「月床し」 399

五〇 祝ひ事つゝける子日若菜かな

帰山

五一 風露のみたれいとなき柳かな 102

「帰山にて」 358

五二 色みせよ花を養ふ窓の雨 152

五〇 子規誰をいさめてかへる山 358

「庭前のはなを見て」 167

知頼ニ而

五三 遠山に咲や白雲花の庭 167

「空 白」

「花を待比 南山にむかへる家にて」 166

□汀亭ニ而

五四 花を先おもふ南の高峰哉 166

五二 夕露の光晴飛はたる哉 404

五五 散や花おしめ風錦はつるゝ糸桜 254

忠張ニ而即時

(ぎむすへ露)

五三 夏の日にむへよらるゝや糸薄

五六 山吹はみにならぬ花の契哉

「むへよらけり」 478

三月尽

又□即時

五七 春そ行つれなき老の別哉

五三 待宵や□の月の下涼み

朔日子規を聞て

「心の月の」 461

五八 夏来ぬと空(カ)に知らん子規

奥村耆州亭ニ而

近江守山ニ而

「奥村惠輝朝臣の許にて

「近江路過る時 守山にて」 399

めされし時 加州執柄の家にて

五九 月うとく名のみもる山夏のかげ

国の人々思ひしたかふ心を」 498

五五 松風や人なつくめる夏のかけ 498

今枝直方別所 池の水辺をみて

霧なから

「爰にとて」 708

五五 かりの子の花にあそへる水草哉 483

五三 薄霧にすむ空おもふ月もなし 654

知頼興行

十七夜 岡島元為

五六 荻の白露に更行月夜哉 594

五三 白雲の立なまされそ峰の月

素庵空溪居士十三回

「白雲に」 653

五七 千ぬや□□蓬か本の秋の袖

菊地治兵衛武包母儀悼

「素庵居士十三回忌」 566

「菊地武包の許へ悼ニ」 617

五六 松虫の音にたてこふるむかし哉

五五 袖ぬれてうふるや忍ぶ草の露

「音に恋らるゝ」 566

「摘るや」 617

素立軒殿ニ而嘉例月見

武康内方悼

五五 今夜月猶みんつもれ老の秋

五五 知らんや夢露の世も秋の床

「月今夜」 699

「知ら無や夢露の世を」 530

△注▽八月十七日付能順書簡(249ページ)参照。

□□興行

生駒万兵衛

五五 空に雁かはせる萩のは風哉 598

五五 有明の月にさはるな宵の雨

踞道

素立軒殿ニ而祝詞

五二 爰をとて越なん雁の端山哉

五七 花の上に見ゆるや千々の秋の色 607

里見元辰興行

五六 秋やいつ鹿鳴山の夕時雨 570

十三夜

五七 照せ猶今夜紅葉の秋の月

小川長兵衛亡父権右衛門懐旧

「全」悼人のもとへ」 537

五八 手向せん其言種の色もかな

「露の言種色もなし」 537

金森内匠興行

五九 植置し心や色香宿の菊 730

島屋与三兵衛正郷新宅

「川島正郷新宅の会ニ」 735

六〇 心はへ色香にふかし宿の菊

「うへしうへけり」 735

伊藤平右衛門尉ニ而

六一 夕月夜時雨月も染出し木の間哉

渡辺二郎即郎殿柴屋写

文台ニ書付ける

「柴屋文台開ニ」 850

六一 其詠いかに柴屋の夕しくれ 850

梶葉ニ筆 蒔絵文台開

岡島元為

「岡島元為の御許にて 梶の葉に

筆を蒔絵にしたる文台開ニ」 779

六二 言葉の色添筆のはやしかな 779

長柄橋といへる文台開

半田正祖

「半田正祖の許にて 長柄の

橋を蒔絵にしたる古き文台開ニ」 813

六三 古き風吹や長柄の橋の秋 813

菊地武包武蔵餞別

「菊地武包の江戸へ下り給ふ餞別ニ」

七〇 武蔵野の秋を心の行多哉 798

六四 枯にけり枯てそてこそ中ノ霜の花薄」

北市屋喜兵衛ニ而 868

丑六 木枯の月に晴行梢かな 864

丑〇 夕月夜有明の曇み晴みしくれ哉

丑一 初雪を松一村の枯野かな 897

丑三 山の皆うつりて爰に窓の雪

「うつるや音に」 943

能拜大徳懐旧 廿三回忌／十二月六日

「悼人のもとへ」 948

丑三 したへとも老はをくれつ雪の道 948

京より待化るなといひ

をこせけるに

「都よりとくのほれと人々

いひおこせけるニ」 956

丑四 雪ふかし春を待みよ帰山 956

友世悼

丑五 うらめしなさそひ残して雪の友

歳暮

丑六 春をまで老なおもひそ年のくれ 969

元禄十七年元三

△77歳▽

丑七 身の春はさもあらはあれ百千鳥 25

丑六 梅か香も雪も袂の若菜哉 前に出たり

前田知頼両

丑九 夕月夜ほのめく梅の匂ひ哉

丑〇 梅か香に匂ふや月の夕霞

(改)月も匂へる夕かな

泉屋二郎兵衛正栄所望

宅にて

丑一 なくさむや待心さへ花の宿 148

丑二 花をそしまかへとてしも春の雪

丑三 風露の色ふししけし糸桜

丑四 影そへて花に水せく垣ね哉

丑五 いつみきとおもひし花の陰もなし 162

阿部新五兵衛正勝 法名主山口中

「阿部正勝悼二」 218

丑六 散残る別うらめし花の友 218

長寿尼臨終正念と聞て

吾毛 うらやまし程経て聞も花の春

花一枝被送たるニ

吾一 枝や我に事たる春の花

花を尽し植たる庭にて

吾名所の有ともいはく家桜 260

三月尽

「三月卅日 小松山王の祠官

章重か許にて会せしに」 271

吾〇 行や今日いさ桜とて春の風 271

吾一 待事のなき身とはいはし時鳥

「なきにしもあらず」 355

吾二 おもふ事いつち寝覚の子規 341

△注▽北畠宮司家所蔵・能順画像に貼付の自筆短冊に

おもふ事いつち寝覚の子規 行年七十七 能順

森権太夫挨拶迄ニ

吾三 若竹の風ふれまほし老の袖 377

松原故鮮ニ而当座

吾四 五月雨は涼しき風空を名残哉

「晴間かな」 385

由比正及嫡子悼

吾五 空蟬の羽に置露のうき世哉

吾六 残れるやかひ有明の朝涼み 452

往生極楽ノ心を

「老の寝覚に」 646

吾七 行方にさそへ心の空の月

(或)さそふや心空の月

「行方へ」 646

吾八 身を捨て心は月の行多哉

七夕

吾九 梶の葉の露計なる手向哉 516

吾〇 秋風に老か身を知一葉かな

はかなき事をおもひて

吾一 世のうさをなくさむ露の命哉 527

祇公正忌日ニ

吾二 朝白や袖も露けき手向草

△作品(後) 一(12)▽

〔宝永元年〕

野村勘□□妻悼

五三 しほるらん時しも秋の袖の露

名 月

五四 又やみんとおもひし月の今夜哉 703

九月十三夜 又此発句ニ同

「十三夜の月見んとて 歎生

かたへまかりしに 発句せよと

たれかれいへりければ 去ぬる

十五夜にせし句なから いさゝ

か心もかはり待るかとして」 745

五五 又や見んと思ひし月の今夜かな 745

西山して云おこせけるに好澄へ遣す

△注V宝永2年8月13日付 岡島元為宛能順書簡(250へ)

シ) 参照。

西山して云をこせけるに 好澄へ遣す

五六 見□ □はや其西こそ秋の嵯峨の山

雨 夜

五七 月をこひ音聞明す雨夜哉

おもふ事 なき秋の

五六 □もなきおもひや秋のさよ時雨

五九 鹿の音や紅葉にまじる山下風 572

六〇 霜にけさしつまる風の木葉哉

(ぎ)は雪の高根哉

六一 木枯の木の間珍し峰の雪

雪や待つれなき梢の枯葉哉

六二 猶の葉は雪待かほの嵐哉

六三 踏跡は木の葉に成ぬ今朝の雪

六四 またれこし山の端いくへ今朝の雪

「遠山幾重」 903

△注V元禄12年、四四三

六五 梅か香は来ぬ春風の雪間哉

岡島喜三郎殿元春悼

晦 日

六六 人に今日終れる年の哀哉

宝永二乙酉元三

△78歳▽

花を送りたる人のもとに

「或人の女の許より 花の枝に

君かため手折し枝や桜花

といふ句を添ていたりし返しニ」 247

六五 折袖の色香やそへて八重桜 247

大森好澄尋来しに

「京都大森好澄くたりけるにあひて」 205

六六 いかにかに花袖の香ゆかし都人 205

暮 春

六七 年は猶春をそ待し春の暮

「春こそ待し」 280

高樓にのほりて

「土方雄忠の庭の高樓にのほりて」 185

六八 爰にみよ四方の山窓花盛 185

六九 ことくくに句へる花の若葉哉 300

「誓円寺月次ニ」 368

七〇 古せぬや老の耳にも子規 368

七一 とはいいつ寝覚村雨子規 343

七二 今朝心しつかに広し四方の春 26

七三 鶯の隙もとめ来る夜床哉 94

七四 梅に咲霞に句ふ朝日かな

竹田氏忠張死期ニ「よに句へ我ならてたに宿の

梅」として野老ニ 申置ければ

「竹田忠張 世に句へ我ならてたに窓の梅と

いふ句を残して身まかり給ふ悼」 60

七五 消にけり梅を残して春の雪 60

△作品(後) 一—(33)完▽

「宝永2年」

六二 色みえぬ匂ひは花の心かな 154

六三 枝はへて匂へる柳桜かな

六四 をのつから風待かほの柳哉

六五 散すなよ命にむかふ花の風

三三 たけ高しいつれ夏草夏木立 479

「秀右の許にて三吟」 412

三三 刈薦のみたれてみゆる蛭哉 412

三四 呼たてようへよ里々田長鳥

「鳴つれて」 371

三五 むすふまに月も氷れる清水哉

「白雨」 438

三六 夕立や月にしつまる軒の露

「ゆふたちは月に鎮まる雲間哉」 438

阿弥陀仏の前ニ而

「奉捧南无阿陀仏」 493

三七 さそふ風おもへ涼しき道の空

「頼めすゝしき」 493

「露」 521

三六 みえ初つ今朝風露の秋の色 521

三六 我心おもへはあたら月夜哉

三〇 夜よしとも告はや雁に秋の月

「秋の風」 717

「都をおもひ出て」 724

三三 雁に秋告やる風のたより哉 724

三宅半夕悼

「友の先達ける悼ニ」 665

三三 まてしはししての山路の月の友 665

人ノ悼 子息もとへ

「川島正郷母におくれし時」 531

三三 おもふさへいかに其野の露の袖 531

上京人ニ

三四 行つれよ都の土産に天津雁

寢覚に

三五 月をみて時雨聞夜の寢覚哉 841

「時雨音きく」 841

三六 鴟の鳴梢は秋の枯野哉

(参考) 「鶉啼て秋の木末の夕かな」 795 「前出四三四」

三七 しはし秋月にいさよふ雲間かな

「秋しはし」 672

三六 秋少残る枯野の薄かな 584



六三 時雨せぬすは夜は徒のならん寝覚哉

「しくれすはいたつらならん」 848

六四 時雨るなよ起臥苦し老の床 849

六五 有明の光を散す紅葉哉

六六 枯てこそ中／＼霜の花薄

六七 戦け猶笹の葉たれの今朝の霜

「竹のはたれの」 879

六八 花紅葉事皆月雪の光かな 917

六九 松風の雪につもれる朝戸かな

節分

七〇 行と来と年をあらそふ今夜哉

一年のあらそふ」 964

宝永三丙戌年元旦

△79歳▽

「以上」

△作品（後）一・附録▽

「瑞順発句書留」

雁か音にね覚の秋の始哉

未  
目に立や秋の末野の小松原

今枝内記殿

残れ猶秋の夕日の薄紅葉

雅君ニ而

あやしさや雲間隠の秋の月

「宝永5年」

子ノ年 可直

人毎の心を分る花の野哉

同 生和

遠山の隔て高き霧間哉

子同 長定月次初

秋の葉の長きためしや宿の松

子同 正祖両吟

涼しさの木間に細き流かな

子同 直方ニ而

こほるなよ風のむら露村薄

丑九月十三

二夜とはかけきやかゝる秋の月

長定月次

梅かゝに今一しほの冬野哉

津田玄番殿

世々かくる松に操の時雨哉

木からしの松に残れる朝日影

正徳元

光る名は云けたれぬや秋の月

伴八矢

木間こそ猶有明の秋の色

<sup>未</sup>何ならぬ草木の露も秋の色

津敬脩

萩薄あはんむつまし花の庭

佐々木定賢

見れは見し庭のや木立や初紅葉

萩すゝきわきて云へき秋もなし

□□兩吟

秋風はいとよりかゝる薄哉

同

雁の声枕に落て月もなし

駒井守政

秋の月見る人からの雲もなし

伴八下屋敷

鹿の音もしめうつせるや秋の山

書信る

秋の空見るや初て初時雨

<sup>未</sup>雁か音を打出て□きけさ夜衣

安通下

<sup>未</sup>澄月は木の下水のひゝき哉

〔白紙二丁〕

〔以上〕

能順書簡三通

能順の書簡は意外と管見に乏しく、かつて「能順伝資料・その二」（有明高専紀要、11号）に紹介した「六月十一日 待宵の雅婦の御もとへ」のほかには未だ僅か三通にすぎない。紹介を許された国学院大学図書館、二十数年まえの採訪写真を御提供いただいた谷沢尚一氏の御厚意に深謝申し上げる。

△書簡二▽

国学院大学図書館所蔵  
「国学家消息」の写本。

十六日の貴札昨日相逢、忝拜見仕候。如仰、十五夜雨天、あたり月ニ而御座候。其後月ハ仄にも見え不申候。御発句珍敷事ヲ被遊候。本哥ニ而聞え可申候。雨夜哉ニ而可有之存候。夜の雨ニ而ハ切字無御座候。爰元少々発句承候。十五夜ハ安房守殿御一家各御発句御座候。不残祝詞ニ而御座候キ。是ニ而発句之躰御推量可被成候。不及御覽事と存候。仍書付進上不申候。竹田殿ハ下屋敷ニ五七人客御座候と承候。

発句

忠張

又やみん更せ今夜の月の友

近比々々出来に候。感吟仕候。

愚句

〔五三九・240ページ参照〕

今夜月猶みんつもれ老の秋

如此仕候。是も素立軒殿を祝詞仕候得共、自身の上ニ成申候。朝ハ方々より手簡ノ返事、飯後ハはや罷出候。帰宅之時分ハ休息仕候故、何ノ勤も成不申候。不覚日ヲ送り申候。来月ならて帰事も成中間敷候。

一 民部殿も廿日ニ御帰可被成と承候。万々期後音候。恐

惶謹言。

「元禄16年」

修竹斎

八月十七日

能順（花押）

△書簡三▽

巻紙二葉。かつて谷沢尚一氏が小松天満宮で撮影された写真による。

猶以御独吟感入申候。弥存命仕、御帰宅之時分得貴意度候。以上。

貴札致拜見候。誠其後には不得賢意候。極暑之時分、弥御健康珍重ニ御座候。野老儀于今痛不宜、其上暑氣難堪、老衰之躰浅間敷事ニ成申候。眼氣も弥疎成候事不

便ニ可被思召候。日外蘭一ニ一伝仕候。相達候由被入

△書簡四▽

小松天満宮北畠宮司家所藏  
軸装。

御念候。将亦御独吟一卷被成候事感入申候。暑苦存候

一名月ノ御発句は重而可承候。

得共、御志不浅事と存、僻墨仕進上申候。御発句も存

愚句之事、去年、

心書付申候。扱は江戸御留守役被仰出、来月上旬御発

又やみんとおもひし月の今夜哉

出之由、間もなき事ニ而御座候。御用御取込可被成

如此ニ而、又九月十三日ニモ此句ヲ同置申候。心はへ

候。誠御苦身成事ニ候。乍去、只今御奉公不被成候而

違中候と存候。如何被聞召候哉。愚意ノ通ニ相聞候へ

ハ無詮事ニ候。不及申事ニ候得共、涯分可被入御精

ハ本望ニ而御座候。此発句両夜用候上は、存命ノ限り

候。存命仕、向後結構成御奉公ノ品見申度御座候。眼

ハ、此句ニ而止可申候。当秋も此句ニ而済シ可申候

不自由故、申留候。御無事ニ御着府之事追而可承候。

月ハ只見る計ニ而可仕候。難期来年候得共、発句ノ隙

恐惶謹言。

明ケ申候。おかしく可被思召候。申上度事共数積候得

〔宝永元年〕

親明軒

共、眼も不見申、書中も右之通無正躰事共ニ候故申留

六月廿八日

能 順 (花押)

候。恐惶謹言。

〔宝永2年〕 八月十三日

親明軒

老葉集両註本板行出来、御求被成候哉。赤井屋常

能 順 (花押)

以方ニ有之候条、江戸へ御参被成、御求□□常々

元為公様 尊答

御見習可被成□□連哥稽古ノ書ニ是程ノ物ハ無御

月も今雁待出る雲井哉

座候。仍申進候。以上。

古き事ヲ口すさひニ申捨候

半八郎左衛門様

貴報

能順筆「おほゑ」

——小松天満宮の創建——

ここに翻字する能順筆「おほゑ」（墨付一〇面）は谷沢尚一氏がはじめて小松天満宮を調査されたころ、二十数年もまえの写真によらせていただいた。原本は未見である。

発句四十五句よりなる本資料を、筆者もはじめは能順の発句書留の最も早い部分かと考えた。「安宅浦へおもむく」とあり、加州下向の折の書留らしいが、聯玉集に収まる句は

加州へ始めてくたりし時

544 朝霧やへたてゝも又越のうみ

（坤・四才）

をはじめ一句も含まれていない。更に、22番の詞書に「去年の花の比は能舜大徳病の床に臥給ふ事のおもひ出られて」とあり、能舜歿の翌年、寛永二十年の書留となる。（六十年忌、五十年忌より逆算すれば寛永十七年歿となるが、寛永十九年春までは生存）

寛永二十年には能順は十六歳、天神社勸請打合せの加州下向には年若すぎる。能順より十九歳年長の能茂をはじめ三人の兄たちなどをこの書留の作者に擬したい。

北野社の記録に見る前田家関係の記事は『年行事之帳』（元和二年）七月十五日の次の記事が最も早く、また、能舜と前田利光（利常）との関係は、元和八年六月二十九日付、能舜宛利光書簡にうかがわれるが、明暦二年の小松社着工までの事情はおお今後の調査課題である。

△年行事帳▽（元和元年）

七月十五（日祝）

四拾目 ほし（櫛）いひ五十袋

老奴五分 同台式ツ

卅式奴 南部諸白樽四ツ但きつ二付八奴ツ、也

六奴 のし式百本

右者松平筑（利常）前守様御礼ニ遣ス、但此内樽式ツ・ほ

しい廿袋・のし百本ハ横山々城殿へ遣ス也（長知）

（北野天満宮史料・宮仕記録）

△利光書簡▽

小松天満宮北嶋宮司家藏

手前病人為御見舞、飛脚被差越、殊御祈念御札守并田

二本送賜、喜悅之至候、猶追而可被申候。恐々謹言。

三元和八年） 松筑前

六月廿九日 利光（花押）

北野

能舜

返報

△作品(後)二▽

おほゑ

十四夜

- 1 世々にしる色や今めく花の春  
2 色見えて水のうへなる雪間哉  
3 曙を霞の残す高根哉  
4 きかはいかに春の物して時鳥  
5 人の世を忘れねはこそ夢の春  
6 散てこそ夏を物色の藤衣  
7 友とする人ひとり二人して  
8 安宅浦へおもむく 折しも  
9 孟秋初なれば  
10 行舟に来る秋早き川瀬哉  
11 秋風の水となりたる柳かな  
12 遠山は只稲妻の木の問哉  
13 木の間とはいはし思はし空の月  
14 おもへとの名こそ深かれ空の月  
15 月の名の立木を桐の落葉哉  
16 いひのこせ思ひ残せよ空の月  
17 言の葉の物色ふかし松の秋  
18 隆之妻に別し悼  
19 似たる色なき世いかなる袖の露  
20 萩の声かてや心夜の雨  
21 降尺せ名は雨よりの後の月  
22 白きよりのちや紅冬のきく  
23 曙を顕す雪の外山哉  
24 梅か香は霞分來る野風哉  
25 おほとかに立や世にしる今日の春  
26 去年の花の比は 能舜大徳  
27 病の床に臥給ふ事の  
28 おもひ出られて 今更哀催  
29 されけらし  
30 世は恠し花は見るらん宿の春  
31 おなし心を  
32 見し人のなき名やあるし花の宿

- 24 下水の縁をゆつる柳哉  
 饞別に  
 25 帰るてふ春のものとや宿の花  
 26 伴へよ花の雲井路帰雁  
 27 卯花もはや古言や宿の雪  
 28 初音いかに聞につけても時鳥  
 29 降比のゆきし忘れぬ氷室哉  
 30 飛蛩月の思はん夕涼み  
 31 五月雨は山近くなる川瀬哉  
 32 露はいさ袖の物なり玉水哉  
 33 言葉を洩たる月の木間哉  
 34 □れし名□言けたれすよ秋の月  
 35 名をいへは月に始も後もなし  
 36 梅か香は野風道ひく朝戸哉

┌

┌

「以下空白」

┌

┌

┌

┌

- 37 降そひて雪をもれたる白根哉  
 38 けふ立を見しやそれとも花の春  
 39 梅か香はことつきやすき野風哉  
 40 卯花や名のみふり行宿の雪  
 木の間月澄登る比発句  
 せよと有しまゝ  
 41 言葉をもれたる月の木間哉  
 42 人心月の集める今宵哉  
 艶勝花  
 43 くらふれは花や下染秋の山  
 元 旦  
 44 世にしろや今日は身の春百千鳥  
 45 色ふかふけさ咲にやは花の春

似生 (前田慶次) 抄

『白山万句』に天正10年2月18日「光源氏物語竟宴之会」山何百韻を紹介した(ハ参考作品一V p 458)。

あらたに寓目した出座作品二巻を紹介し、この「異風人」連歌好士についての所伝三編を附す。

ハ作品(後) 三V

天正十六年壬五月十日

天理図書館所蔵「紹巴等連歌集」ハレ4、143Vによる  
翻刻番号 四九二号

初 何

しつかうふる田哥のこゑも都かな

紹巴

時し忘れぬ山ほととぎす

似生

夕月夜有明も猶待なれて

昌叱

いくへか霧の立かこふらん

心前

風過る砌のゝへのつゆふかみ

楚仙

なひきそひたる草くゝの色

莫怙

むら竹の下は乱るゝ道の末

覚全

舟さしおとす跡の河水

宗已

ウ 柴人の帰るふもとの里暮て

長俊

雲のまにく時雨行空

紹与

音も今あらしの風のさえ渡り

宗務

更ぬるよはの鐘のま近さ

玄仍

夢はたゝ結びもあへぬ草枕

一千代

利益 慶次

滝川義大夫妾懷妊シテ仕藏人利久而産ス。仍利久子分トシテ贈前田氏。高德公姪分也。異風人ニテ種々物語アリ。慶長五年頃寄食于上杉家。会津表ニテ少功アリ。後年帰当国云々

正虎 安太夫  
早世無嗣断絶

女子 北条采女妻  
主殿早世無嗣而絶

女子 戸田弥五左衛門妻  
戸田住于越中富山

(当邦諸侍系図)



二

ねられはこそその月のかたしき  
 身にしめて人待戸ほそさし残し  
 露になみたに袖はぬるめり  
 共にみし花は昔のかけにきて  
 霞のうちに鳥そさへつる  
 春のよはしははかりに明はなれ  
 日影うつろふ嶺のうす雪  
 おくふかき滝つ流の音そひて  
 岩ほつたひの橋の一すち  
 立ならふ松に栖やこもるらん  
 朝けのけふりなひく末く  
 雨過る跡は光のほのかにて  
 月もそよめく窓の呉竹  
 涼しさの夕や秋をさそふらん  
 蛸のなく山のした道  
 凧の吹残したる色さひし  
 且くつもる雪の杉むら  
 神かきの風の玉鉾幽にて

巴 生 叱 前 巴 生 仍 務 与 俊 己 全 怙 仙 前 叱 生 巴

帰るさいつこたそかれの袖  
 その人とおもふもさらに面かはり  
 年へて後にめぐりあふ中  
 ことなしに入はうれしき関むかへ  
 あつまといふも遠からぬ道  
 ニッ 聞からにことのしらへは猶あやし  
 ふりたる宮の庭の松風  
 作なすあたりの廊もかたふきて  
 さすかに絶ははてぬかけはし  
 山人のふむ跡残す秋の霜  
 たゞ一枝もきくはかうはし  
 扇をも置こそあへね舞の袖  
 月に猶はたくめるさかつき  
 打もねすかたるや旅の相やとり  
 別もよほす鳥のねはうし  
 又とたに行多たのまん人ならて  
 世を捨つゝもかくれいる山  
 みよし野やおくも道ある花さかり

巴 仙 怙 与 叱 仍 俊 己 務 巴 生 全 前 叱 巴 俊 全 己

春の雲ひくひはら槇はら

三 明はつる空より雪の消初て

うくひすの音をまつの戸の内

一とせの暮をいくかとかそへ出

たちかへはやの衣手の色

帰らむの都に近き身のやつれ

命あれはそゆるすさすらへ

明石かた跡ははるけきうらの浪

千とり啼立月は秋のよ

七夕や舟渡すらんあまの河

霧の雫の暮て音する

侘つゝもすめは住ぬるさゝふきに

外はあらしのいかならん山

霜はたゝ消ぬる上に置まよひ

かきやる度にうき乱かみ

三ツ 言葉もつゝかしかこつ文の内

絶んちきりとなれる一きは

思ひ侘なやましきには打ふして

前

夢のたゝちを頼む哀さ

己

咲をめてちるを忘るゝ花の友

叱

くれんもしらすすみれ摘袖

怙

跡は猶分行方もかすむ野に

巴

ふくたによはき春風の末

全

影やとす月やこほさぬ今朝の月露

生

いつくに鹿の立とかへぬる

前

残らすも岳への田面刈はらひ

俊

霧間なかるゝ水は冷し

叱

行やらて小舟たゝよふ秋の浪

与

入江も暮て風やはけしき

務

名 焼影も笹やの芦火みえかくれ

仍

蛩とひかふ草のはつたひ

仙

袖はたゝ涼しきよはの露分て

前

野寺に夏をむすふあかつき

巴

法にはたうときのみなる身はかなし

全

心よりこそ国もみたるれ

与

後見はたゝいはけなき程にして

生

叱

仙

俊

己

前

怙

仍

務

生

巴

己

前

全

叱

務

俊

巴

名号

おとしめぬるもあふせとそなる  
 さぎの世のえにしやふかき思川  
 たゝ忘れぬ涙度く  
 古郷のうきをも月にしのはれて  
 秋にはたへん心ならめや  
 かつもろき落はにたくふ身のよはひ  
 ことゝふもなき霜の細道

冬までも田つらの庵は荒残り  
 をのつからにて高き松かき  
 わき出る岩間の水の浅みとり  
 たるひとけ行山のかたはら  
 色もまた梢にこもる花待て  
 そゝきてはるゝ藤かえの雨  
 閑なる夕の露やかすむらん  
 外面のてふの立もはなれぬ

紹巴 十一 宗己 八  
 似生 九 長俊 八

生 与 俊 怙 叱 前 巴 全 己 叱 仍 仙 与 生 怙

△作品（後）四V  
 天正十七年二月廿六日

昌叱 十一 紹与 七  
 心前 十 宗務 六  
 楚仙 七 玄仍 六  
 上人  
 莫怙 八 一千世 一  
 覚全 八

蓬生も道やあまたの花の本  
 かすむ外面の野を分る袖  
 朝かりのこなたかなたに駒なへて  
 嵐の雪のはれわたる跡  
 時雨もや遠の高ねに残らん  
 入方にしもうすき月影  
 秋の日のくるゝかたへに立涼み

京都大学附属図書館蔵、  
 平松家旧蔵本A七シ26Vによる。  
 大阪天満宮御文庫本A八れ515V、  
 同じくA甲26Vにも。

紹巴 長澄 玄旨 昌叱 禅高 安津 由己

帰さしたふむしのこゑく

ウ はらふにも露は袂に置そひて

道もしられぬ野辺の草く

いつくになかなかれゆくらん水の音

うかへる舟はなみのまにく

見るくも遠鳴わたる村千鳥

風吹をくるすゑの松原

そことなき夕の寺の鐘の声

いはほつゝきの道かすか也

さをしかのかよふ行衛は野をかけて

田つら一かた色になるころ

ほのかにも入江の蘆の乱あひ

月くらきよに小舟さす音

雨は猶降初しより晴やらて

いほりのあたりくつる青柴

ニ まはらなる垣ほもかつはかこひ捨

おれふすまゝの園のむら竹

初雪の積るとみしも消はてゝ

似生

新慶

玄仍

能札

一千代

澄

巴

叱

高

津

旨

仍

己

生

慶

巴

札

旨

朝日さやかにさしのほる山

さへつるや同しねくらの鳥の声

春より後のかけの木ふかき

河水のみとりをひたす柳原

名残しはしの五月雨の空

明ほのやたゝよふ雲の絶く

月かすかにもまたうつつ峰

あとさきに鳥羽田の雁の鳴落て

秋のあらしを袖のさと人

けふれともひろふ紅葉をなさはおし

かたふくひかりうすき夕霜

ニッ 末遠きやとりとひよる野はさえて

つれにし友やのこる一むら

越やらて山のふもとになく鳥

尾上の雲や風のはけしさ

松は猶ところくの枝たれて

いとすちみたす滝津しら波

つりさほもむなしく帰る河舟に

澄

高

叱

己

津

慶

生

仍

巴

叱

旨

札

慶

巴

己

澄

叱

旨

三

蘆屋のうちそ人気がたえたる  
 露はたゞ芝生か末もみえわかつて  
 霧にゆくく袖しほる暮  
 玉まつる野ははるかなる方ならし  
 ふむ跡もなき道のへの月  
 花にねてたかわかれをか忍ひけん  
 胡蝶はかりの面影のゆめ  
 霞のみあれしみきを立こめて  
 ふるゐの水はけふりたえにき  
 草の根も石間の氷とちかさね  
 かれぬるまゝの昔の一すち  
 人めさへあはれむかしの道ならて  
 くつれそひたるそはのかたくく  
 かきくゐやはたのさかひと成ぬらん  
 賤か住るそとなりへたゝる  
 おもはずもみちくる塩の入海に  
 みおさかのほる舟のあやしき  
 みるかうちにかけほそきよの月すみて

|              |                |               |               |            |               |               |                 |              |                |             |                 |               |              |              |                  |                |
|--------------|----------------|---------------|---------------|------------|---------------|---------------|-----------------|--------------|----------------|-------------|-----------------|---------------|--------------|--------------|------------------|----------------|
| 高            | 生              | 仍             | 津             | 巴          | 叱             | 旨             | 慶               | 津            | 巴              | 生           | 叱               | 澄             | 旨            | 巴            | 高                | 仍              |
| そよくとするも荻の葉の露 | 村雨やあつさ残さずさそふらん | せみのは山のくれはつるかけ | けふことにほのめき出て飛螢 | 汀をちかみたかき草村 | 浅沢のすゑの塘とつきそへて | あらためつくる田面はるけし | かへりすむたより大井の里としれ | 真柴たく火のかけわつか也 | 山風のをとや雪気になりけらし | 松の木のまの花のしら雲 | しかの浦やかすむよもやゝ明渡り | さゝなみよする月のゝとけさ | 跡遠くこきつれつゝも泊舟 | たれか都をかへり見さらん | うき世たゝあらしのみにながらへて | すめるあかしのをかのかたはら |
| 名            |                |               | ミラ            |            |               |               |                 |              |                |             |                 |               |              |              |                  |                |
| 旨            | 札              | 叱             | 己             | 慶          | 高             | 札             | 叱               | 澄            | 生              | 旨           | 巴               | 叱             | 津            | 己            | 高                | 仍              |

花橘のちりはつるあと

かそふれは標を風のかきりにて

春立し日のすくるほとなき

つかひはやいそく春日の神祭

爰にかしこにかすみくむ袖

いつのまに月はなかれにうかふらん

うらかれそむる山のした草

白露にまかふはかりの秋の霜

軒もる風のさむき衣手

独ねのつらきなからに明しはて

たへぬうらみをかきをくる文

あはれ猶ありて何せむ田舎住

たゝひとへにそおもふ後の世

名ウ さけは落る花を心におとろきて

はふきしつかに鶯のなく

春の霜とけわたりたる朝朝

やく野かた分もえ出る色

小山田にまたき種をやまきつらん

生

旨

巴

叱

高

澄

札

己

仍

津

旨

巴

澄

仍

巴

生

叱

己

秋なをちかし住吉の庭

淡路瀉霧の隙／＼あらはれて

更ゆく月の空そしらるゝ

津

旨

高

(一)

△前田氏系譜▽

利治 或利益。又利太。自称宗兵衛。后称慶次。実滝川

左近将監一益従子儀大夫某男(或曰一益男也)。为利久嗣。

冒姓前田氏。初仕信長公。後遭天正之变。属于利家。禄

六千石。居能州松応村。後辞禄退居于京師。関原之役属

上杉氏家臣直江兼統。有戦功。軍敗之後禄。仕上杉氏於

会津。遂終其土。善連歌矣。嘗伴佐渡守云云。妻五郎兵衛安勝女。

(二)

△本藩歴譜▽

慶次郎利太、初名利益、初通名宗兵衛と称す。(或慶次とす、謹按皆常に郎の字を省き唱へるか故に、書記にも移たると見ゆ。天正十三年阿尾城攻衆の内に前田宗兵衛利益とあり。)

実は滝川左近将監從子儀太夫益氏の子也。(或一益の子と云。真偽一統志云、益氏討死の後懷婦姜利久の室と成、故出生の息自然に利久の養子と成とあり、考に附す。)利久君養子とし女婿とす。初信長公に仕へ、後高德公に従ひ、六千石の地を与へ玉ふ。(高德公譜略云、能州を賜ふ時御越、利久君へ七千石被進処、利益へ五千石御渡と見えたり。)能州松尾に居せらる。(松尾一松応に作る、嚮に此地を正すに今此邑名なし。七尾の内の一つに松尾と云あり。畠山氏の城址なり。又鹿島路村に松尾と唱る地あれども、是等の地に居せらるゝ事、土人伝言の説なしと云。初尾州に居せらる。即壬子集録中荒子

城図中に巽方慶次殿屋敷あり、東西二十間、南北十八間とあり。)後祿を辞し、(高德公譜略に、慶次殿関東陣迄御家に御入候とあり。)京師に至れり。(寺町通に僑居とあり。)慶長五年関原の軍起りし前奥州へ至り、国老直江山城守兼統が吹拳を以て、上杉景勝に仕へ、二千石を領す。(奥村氏本御系譜)兼統に属せしめ、出羽最上家の兵と戦ひ、天童城攻等に奮戦屢功あり。(戦功の事春日山日記等に詳也。又武辺咄聞書に高德公を憚り出家して穀藏院ひよつと齋と更名せられし事あり。)景勝封を米沢へ移されし時処士となる。諸侯其勇名を聞て徴せども並に就かず。奥州会津にて卒しぬ。(卒年未詳。或云農夫田畑村大隅が家にて卒せしとも云。米沢志曰小梁川伏の隠居疊東山上村戸の内に山鷲の館と云あり。此所前田慶次郎屋敷とあり。石碑は善光寺にあり。堂守松田山善光寺は延徳寺末寺とあり。謹按山鷲館は、嘗官仕の時の第地なるを伝称する成べし。)性豪爽にして驍勇なり。(武辺咄に載す。)又恢諧にして能詩を賦し、(五言絶句を即時に作て、林泉寺方丈に進覧すること混見滴写に見えたり。又大島維直曰、嘗上杉侯家土山田長三郎云、慶次君が詩集若干あり。其

藩中に行はる。又肉書の韻礎一本あり。公庫に現存すと云。詩集我藩に伝はらざること遺憾余りあるなり。並に連歌に工なり。昌叱の輩と唱和をなすと云。(一本御系譜に一句を載するあり。因に附す 前田慶次君嘗遊法橋昌叱宅、雪折やつれなき杉の下涼み、慶次殿、時雨行かど蟬の啼山、昌叱。) 室同宗五郎兵衛安勝君女也。利久君養女として利太に妻す。卒年未詳、一男五女あり、安太夫正虎利太の子也。初我藩にて采地二千石を賜ふ。(寺岡覚書) 光悦の風を学で書を能す。後浪士を以て能州七尾にて終れり。(卒年知れず。) 嗣なし。利太君五女、(下略)

(三)

【松雲公採集遺編類纂 百八十三】

前田慶次殿伝

遺書

利卓公御息女 於華様 戸田弥五左衛門尉方邦ニ契約成タマヘルハ、慶長五年尾州宮海之涉リ船中ニテノ御事ナリ。今妓関ヶ原御合戦ノ時、軍散而 利長卿尾州宮海ヲ涉ラセ勢州桑名ニ越サセタマヘリ。此時、戸田

方邦ハ殿ナル故、御陣ノ御船ニハ一里程隔テヲソク漕セリ。利卓公此陣中ニ主従七人紛レ止リ、多年之望ヲ全ク今日ニトゲント伺ヒタマフニ思不成、空而同ク宮海ニ臨ミタマヘリ。船ヲ需タマフニ、皆沖ニ出テ涉ルニ便ナシ。爰ニ鉄藪<sup>(マツ)</sup>之験サシテ戸田方邦ノ船而已未タ近ニヨツテ、船ヲ岸ニヨセヨト声々呼ハレテ、方邦敵味方ヲ弁ヘサレハ、鑓ヲ提、舟バタニ立テ、甚怒レリ。利卓公、謂有テシルシヲ隠セリト、理ヲ説テ卒爾ナル由ヲ述、猶便船ヲ乞タマヘリ。戸田諾シテ、隔タル舟ヲ漕ヨセ、終ニ同船シタマフ。利卓公ト方邦ト寛々対面スル事今日始テナリ。利卓公方邦ガ勇猛勢ナルニ甚タナツンデ云ク、我望アリトイエトモ、今日ニ極メサレハ最早望ニ年ナシ。念爰ニ去レリ。死ストモ不悔。併吾レニ一ツノ愁アリ。我ニ女ヲ持ツ。一ツハ夫アリ。今妹<sup>ニカラ</sup>□カラス。仍吾カ愛子ト云シカ。彼未タ夫ヲ定ス。吾望ツキテ死ヲ定メントスルニ、只彼ヲ愁ヘリ。方邦尙無婦人ハ、彼ヲ定メタマハルヘシ。利長ニモ難面棄タマヘル程ニモアルマシ。方邦吾言ニ諾シタ



マハ、我悦不過。山野ニ身ヲ蟄シ、自落命ヲ待テ、利長ノ心ヲモヤスンゼン。利長之我ニ知通ヲ添タル意モ疾クシレハナリト深ク哭シテノタマヘリ。戸田方邦其品ヲ承知シテ、野夫未宿ノ妻ナシ。御心易ク思食セト安ク領掌セリ。船桑名ニ至リテ、利卓公ハ今ハ心易ト方邦ニ別レテ、直ニ高須ノ道ヲ経テ大和ニ越タマヘリ。方邦凱陳之後、彼息女ヲ迎入シ事ヲ案スト雖モ、利卓ノ女成故ヲ利長卿ニ申兼テ、時節ヲ憚リ婚姻ノ沙汰ヲ云ス。心外ニ延引セリ。利卓公方邦カ憚リテ延引スルノ心ヲ察知リテ、翌季知通ヲ加州ニ越シ、利長卿エ其旨ヲ告タマヘ、猶茨木刑部ハ方邦ニ縁アル故、頼タマヘル由ヲモ仰ツカハサレタリ。利長卿ニモ早く御<sup>マ</sup>拳容アリ。御妹君ノ御盃アリテ、方邦之方エツカハサレタリ。

利卓公ハ実ハ滝川左近將監一益之弟ナリ。利久公養子トシタマフ。利卓公心タクマシク猛將タリ。謂アツテ浪人トナリタマヘリ。故ニ一ツ之望アリ（意趣ハ秘、爰ニ不語）然レトモ世モ末行シ、次第ヲトロウノ理ニ

ヨリテ秀ノ日ナシ。若ハ利長卿ニモ背キタマハスハ可然ケレトモ、只望ヲトケント夫ニモ随ヒタマハス。剩戦ヲ好テ、後々ハ景勝ナトノ陣中ニ至リ、上杉ト心ヲ友ニシ、望モ後ハ恨ニ変シ、種々之業ヲ尽シタマヘリ。仍利長卿ヨリ嘗度々ナリ。利卓公年歴テ痞病発セリ。時ニ病ヲ保育スト号シ、大和ニ越、洛ニ至リ、種々ノ犯惑<sup>ワ、モ、ウ</sup>ヲ振舞タマフ故、世人皆□<sup>ウツク</sup>テ加州ニ告タリ。利長卿ヨリ嘗ツヨキニヨツテ、洛ノ居不叶、大和ノ刈<sup>カ</sup>布<sup>フ</sup>エ蟄シタマヘリ。利卓公年歴テ病甚シ。故ニ入道シテ、ミツカラ龍碎軒不便齋ト号シタマヘリ。不便齋此時ニ至リ、浅野・多羅尾・森此三人加州ニ戻シタマエリ。知通ハ利長卿ヨリ添タマヘル謂アルヘケレハ、我カ死後ヲ見届ヘシト留タマヘテ、知通ト纒ニ下辺二人ト給仕シテ月日ヲ経タリ。不便齋病次第ニ盛ニシテ不治。慶長十年十一月九日巳ノ半刻、享年七十三ニテ卒シタマヘリ。則刈布安楽寺ニ葬ル。其林中ニ一廟ヲ築キ、方四尺余、高五尺之石碑ヲ建、銘ニ

龍碎軒不便齋一夢庵主

ト記セリ。俗ノ姓名并落命之年号月日ハ謂アツテ不  
記。利卓公ノ死スル所ヲ知ル者ナシト云ンカ。大和国  
刈布村ト云所ハ、同国ノ旧跡当麻寺ノ山ヲ左リニ西ヘ  
二リヲ行テ里アリ。茂林<sup>モリ</sup>ト云。夫ヨリ南エ一里アリ。

承応元年正月

野崎八左衛門知通

七十七才述書

慶次郎君一男三女

某 安太夫

城州京都ニ行、誼譚シテ人ヲ傷害ス。其罪難免処、  
宰相利長公請之、則能州七尾ニ引取玉フ。於斯終ニ  
没ス。

女 名坂 方秋妻

女 北条主殿嫁

女 名佐野 山本勘解由嫁

〔以上〕

右ニ遺言スル事ハ、利卓公ニ添ラレテ、一生ノ有増ヲ  
シリ、卒シタマヘルノ儀モ知レリ。他ニ知人ナシ。戸  
田氏ステニ我カ主トナレリ。正ニ弥五兵衛殿之外祖タ  
リ。巡忌及旧忌此家ニテカフムラスハアラン。我死  
テ、ナンチ不知トイハ、知通何ヲ勤タリト云ン。爰  
ニ久シキ苦心ヲ空シクシテ、剩他ノ嘲ヲ霑ン。又利卓  
公之骸ニモ異笑ヲツケン事、甚口惜。仍テ十分一ト云  
トモ只其尸ヲ葬シ地、落命之月日ヲ一息一言シテ残  
ス。旧忌追善之種ト思フノミ。

利家卿・利長卿ニ命ヲ奉リテヨリ右皆秘スヘキ謂アレ  
ハ、汝能思フヘシ。今ノ遺言子ノ耳ニロヲアテ、必伝  
ヘシ。彼地ニ至ルノ事アラハ、誤テ乗打スヘカラスト  
後ヨリ後エ秘テ伝ヘシ。

〔以上〕

加賀筑前殿御前様御煩御祈禱

於北野万句 花

よろこひをくはふる花の色香哉

と『昌琢発句帳』に見えながら、この万句の伝存作品はこれまで全く見られなかった。最近寓目した連歌懐紙は旧加賀藩士家に伝来したよしで、剝離のひどい四句目・

五句目の連衆名が、初裏からが「一二付け」のため推定できないものの、新しいときはさぞ華麗であったろう金銀泥下絵の懐紙に清書きされているのは、件の前田家北野法楽万句のうちの一巻ではないかと推定した。当時に村家に連歌留学中の太宰府天満宮司務別当の嫡男・大鳥居信助が出座しているのので、同社の社報『とびうめ』75号（平成元年1月）に紹介した。

宰府の御祈禱連歌 研究余滴・その十三

青年大鳥居信助の連歌留学時代

——いわゆる△地方法文人▽の視座よりの検証——

なお、このときのものと推定される能舜（能順の父）

宛利常書簡を本稿251ページに引用しているので参照されたい。

△作品（後）5V

元和八年七月六日

賦何袋連歌

花に又はな咲露の真萩哉

をしかもむしも声たつる暮

影てらす月にひろ野の道分けて

ぬれてすゝしき山<sup>か</sup>の薄霧

川な□のか□□やなせを守ならし

風に紅葉のちりし水上

いく度か高ねをめくるむら時雨

きゆるあとより雲うかふ空

ウ 入残る日影とみしも暮わたり

旧加賀藩士家伝来の  
原清書懐紙による。

千勝

行生

信助

□□

□□

能委

能益

能典

一

ねくらの鳥の音をたえぬめり  
 行くも竹のはやしを分すきて  
 明はなれたる道のすゑく  
 梯の霜かと見しは秋の月  
 霧ふきはらふ山風のをと  
 槇原やさらに色なきかけならし  
 花より後のみよし野のおく  
 きえわたる雪を水かさのたき落て  
 岩間くもひかりのとけし  
 人氣なき田面にさきやあさるらん  
 里にはなれて道は遠しも  
 かたしくはいかに佗しき草枕  
 はらふあとより猶そての霜  
 二  
 あらましく風や吹来る空ならん  
 舟の行衛やなみのあらいそ  
 松かけも越るはかりに塩みちて  
 あまの住家はいつちかへけん  
 たとり入おく猶ふかき小野の山

二 三 四 五 六 七 八 九 十 一 二 三 四 五

二  
 それかあらぬかすかる啼声  
 月にしもからすとひ行予のには  
 霧にくれたる道のさひしき  
 草くの生そふ露のふる跡に  
 なかるゝ音もわかぬぬま水  
 野辺はたゝあつさしのかん方もなし  
 山のかくれに分てよるそて  
 そことしも聞すへぬるやとりの声  
 夏をもまたて啼ほとゝきす  
 雨そゝく藤のたそかれしつかにて  
 戸さゝぬ門そ人やまたるゝ  
 うかれめのちきりかくるははかなしや  
 したしみかほも何ならぬ中  
 かつとけし心なからもつれなしな  
 たのむつかひそまたいはけなき  
 立まひし袖のよそほひたゝならて  
 見いれもふかき百ふしの内  
 そらたきやこすのひまくかほるらん

六 七 八 九 十 一 二 三 四 五 六 七 八 九

|                      |   |                      |   |
|----------------------|---|----------------------|---|
| 今日の物見の車ゆへある          | 十 | 戸さしひらけは秋にすゝしき        | 四 |
| 御幸する大原山の花さかり         | 一 | 日くらしの声は軒はに遠からて       | 一 |
| かけもかすまぬ月に明たつ         | 二 | あやしやろうを山やめくれる        | 二 |
| さゝ浪や氷りのひまをしらすらん      | 三 | 白雲と見しや咲そふ花の色         | 三 |
| 池のかたへにさはくうろくつ        | 四 | 霞かすまぬけさの明ほの          | 四 |
| 三<br>くつれしはあと高からぬ岩ほにて | 一 | をくるゝはよしやとゝまれかへる雁     | 五 |
| 作りすてたる賤かそしろ田         | 二 | 春なからふく風あらき空          | 六 |
| 里遠き方にあら猪やかよふらん       | 三 | 釣舟は浦半のなみにたゝよひて       | 七 |
| 山かけよりもまつくれぬめり        | 四 | いかはりかは高きしほあひ         | 八 |
| あつさをしはらひはてたる松の風      | 五 | 村芦のおれふすまゝのかたつかた      | 九 |
| みきりにはるゝ夕立の露          | 六 | 霜の深田は道たにもなし          | 十 |
| 日の影や雲をはなれてうつるらん      | 七 | 岳越の里より遠に月落て          | 一 |
| やふしかくれにさらす調布         | 八 | しらぬ野中のかりねすさまし        | 二 |
| 見るさへも侘しかりける住ゑにて      | 九 | 手はなせる小鷹の行衛もとめかね      | 三 |
| 人の行来もたえく道            | 十 | 色にしけ木のたちつゆくかけ        | 四 |
| 河はしやくるれはなみのひたすらん     | 一 | 名<br>時雨ぬるあとより秋のしくれして | 一 |
| 竹のはわたる風のはけしき         | 二 | まよふはおなし空の雲きり         | 二 |
| 月にちる露は玉かとあさむかれ       | 三 | わかつこそくるとあくとのさかひなれ    | 三 |

ひゝきいてぬるかね近きをと

きぬ／＼をもよほすきはの物思ひ

しのふちきりはわりなかりけり

ぬし有になとかつきぬる恋心

おり／＼かよふ宇治の中道

たえぬこそ河風の末山おろし

なみにちりてや木はうかへる

一方にあしるの床のかたふきて

すみすてぬらしたなかみの里

秋の夜もみれは明やすき空の月

色をそへたる霜のしらきく

名

引かこふ霧の笹はまはらにて

風ひやゝかに吹をくるなり

船やたゞさゝぬもなみにへたつらん

□ しるき朝なき

比良のねや雪□去年なる花の春

木たかき松のみとり立そふ

鶴はすをはな□□声の長閑に□

明て□すみに猶ひろ□

□

四 五 六 七 八 九 十 一 二 三 四 一 二 三 四 五 六 七

光高代(直賢・直頼等) 連歌

(1) 「昌程・光高・相也等百韻」

△注▽前田光高の連歌は「靈椿遺芳」(加賀松雲公所収) 写真による左記百韻一巻しか伝存しないので、首欠のまま収録する。

寛永21年3月17日 「夢想」

開より梅は千里の匂ひ哉

御1 光高12 利常1 大千代1 昌程12 昌佐12

相也12 孝治12 重成12 広直12 定延12

執筆1 『白山万句』△参考作品四▽P 467

小松天満宮北鳥宮司家所蔵  
写本「光高代連歌集」の(1)

△作品(後) 六▽

「前欠。二折表七句目より」

松原や末ほのかにも明はなれ

幾むら鴉さわきたつ声

深山路や月の夜比は猶侘し

暮る岩間の露のかりふし

なひき合薄か本をやとりにて

小萩咲野にしるき虫の音

時来ぬと都の嵯峨は秋風に

ニウ

さそな大井の里は住うき

川音を聞はさなから時雨にて

袖も枕もうく我なみた

きぬくゝのわりなざ歎く左筵に

かたみにしのふ契くるしき

親さくる中も折く問かはし

みぬかたちをはかたるにもしる

学ふるは天津乙女の舞ならぬ

笛の声すむ此宮の中

たそかれの門の行ては過やらて

霧のまきれの道の小車

いさなひて月を待間の関むかへ

しはしあたゝめくめるさかつき

紅葉々の詠に花もわするらんし

かこふ四町の秋の一かた

三 明過る田面に鳥のあつまりて

岡辺にうつるひかりしつけし

草くゝの霜は見るくゝとけ渡り

高

相也

定延

直賢

直久

広直

昌程

知清

相也

高

直賢

直久

広直

昌程

高

相也

知清

定延

冬のものとてさける撫子

昌程

ゆるされ帰る浦のさすらへ

相也

きりくす夏野にきかぬ声す也

高

いそかんと日和待あへす舟出して

広直

風も嵐にかはる垣内

直久

俄にすさふ秋の塩風

定延

九重のよそに来て住柴の庵

直賢

雁の立真砂地落る雨の暮

昌程

我世の友となる嶺の月

相也

月も置とめぬ松の下露

直賢

入あひの鐘や身にしむ空ならん

広直

花ちりて霞む夜わふる芦の屋に

知清

霧間にしるし待か袖の香

高

田返し捨るわれも賤の男

高

諸共に見は一しほの菊の露

昌程

名 永日にやつれし衣ぬきほして

相也

あたら千種の枯はてし庭

直賢

藤の袂もかきりある春

昌程

哀にも問ふ古跡はあれ添て

知清

奥いかにいるとிரぬる春日山

直賢

つれくなれや志賀の山里

定延

雪ほのしろし谷あひの道

直久

三ッ 五月雨におりはへて鳴郭公

相也

暮ぬれは真柴取つゝおひ帰り

定延

花橋におもふいにしへ

広直

つかれて見ゆる駒の足なみ

広直

齡たけし身もはし近く枕して

直久

終日に北吹風ややまさらん

高

ねたるやきかぬ酔のくりこと

昌程

寄波高し越の海つら

知清

ことふきの数をつくせはおわる夜に

高

方く釣せてつなく海士小舟

昌程

はつもとゆひのよそひたゝしき

知清

夕立めくる松のかげ道

相也

唯人になせる行衛のやすからて

直賢

山きわに驚のねくらをあらそひて

直久



|                 |       |                          |    |
|-----------------|-------|--------------------------|----|
| もれていつくに田鶴かけり行   | 定延    | △作品(後)七V                 |    |
| 人通ふ田中はうすぎ今朝の月   | 知清    | 〔直頼・直賢両吟百韻〕              |    |
| 霧の隙なる霜の咎ふき      | 昌程    | 〔前欠(二折裏三句目まで)につき省略〕      |    |
| 漸寒き風や夢おしさをふらん   | 相也    | (3)〔昌左・直頼両吟百韻〕           |    |
| うつや砧のひよく手枕      | 直賢    | 何人                       |    |
| 旅なるをおもふ心の浅からて   | 定延    | 時雨をもしらすや陰を宿の松            | 昌佐 |
| うき世はおしめ花の一時     | 高     | 雪めつらしきあけほの山              | 直頼 |
| やまふぎや哥にいふへき種ならん | 昌程    | 八重雲も嵐に秋の月晴て              | 同  |
| 水の底にも蛙鳴こゑ       | 広直    | 雁の啼来る天路遙けし               | 左  |
| 小雨せし砌の池辺暮初て     | 知清    | 夕なきの海ほのか成芦原に             | 同  |
| 島このみぬる此とのつくり    | 直久    | さしかくれたる浦のつり舟             | 頼  |
|                 |       | 俄にも雨気もよほす塩曇              | 々  |
| 昌程 十五           | 直賢 十二 | 笹屋のにし日影かすかなり             | 左  |
| 御句 十三           | 定延 十一 | 〔以下略。二折表十四句目より三折裏十句目まで欠〕 |    |
| 相也 十三           | 広直 十一 | 昌佐 五十                    |    |
| 知清 十三           | 直久 十一 | 直頼 五十                    |    |
| 執筆 一            |       |                          |    |

小松天満宮北島宮司家所蔵  
「光高時代連歌集」(2)・(3)

△作品(後) 八▽

小松天満宮北島宮司家所蔵  
二光高時代連歌集二(4)

〔直賢・直頼両吟百韻〕

富士の根や月の都の歩路哉

みな雲霧の晴わたる空

先達もおくるゝ雁も数見えて

刈跡ひろき早田晚田

せき捨て堤によとむ秋の水

岩陰行は袖のすゝしさ

絶やらぬ苔の雫や深からん

霜のふるよの松は木高き

ウ 吹送る軒の山風さへく〱て

かね聞まくらゐるたにねられす

有増にけふ迄過る世はかなし

いつ行てみん天の橋立

遠かりしいく野の道は踏しらて

旅をいさなへ小をしかのこゑ

山ふかみ幾木紅葉の残るらん

あらしの末もよはる秋風

終夜打やきぬたのつちの音

泪あらはす手まくらの月

其事と言には出ぬ恨にて

友としするをたゝ恥るのみ

花もさそ松の思はん国の春

我國かほの梅のうくひす

ニ 主なき宿はさひしき夕霞

たゝけは風のこたへする門

ほのかなる灯消し古寺に

更るまにく〱澄みねの月

一日く〱梢の秋になりて来て

いろ付わたす陰の真葛葉

神垣の内外もわかす置露に

霧いかはかりふるの中道

朝川の水は田面の末かけて

袖はるかなる柴はしの上

頼

賢

々

頼

々

賢

々

頼

賢

々

頼

々

賢

々

頼

々

賢

々

乗駒に任て行や誰ならん

頼

三鷹飼や小鳥にあかてうき心

賢

嵐に昏て寒き雪の日

々

暮て帰れば家路はるけし

頼

爰かしこ狩尺してのまとり山

賢

入江漕舟はあしへをしるへにて

賢

小篠打敷まくらしてけり

々

うき霧ふかき難波津の波

頼

ニ  
明日まではふらしと思ふ花の陰

頼

秋に今時雨来にけり生駒山

賢

袖こそぬらせ春雨の露

々

花の桜もみちちる色

頼

ひかり待胡蝶の宿立さらて

賢

時鳥いにし林に鴝なきて

賢

霞に今朝の夜を残す庭

々

月に明ては夕日とそなる

頼

東風吹はひらきし窓もかため置

賢

草の戸の詠はさひしいかゝせん

賢

笹屋ま近きうら波の音

々

おしむかひなく消し初雪

頼

寄来ぬる小舟の楫のとり／＼に

賢

分入は竹の葉さはる道せはみ

賢

月に向ふる星合の空

々

ふね引なつむ古川の末

頼

琴の音も律のしらへに引出て

頼

浅き瀬の浪のしからみ朽添て

賢

身にしむはかりならず笛竹

々

うつろひはつる山ふきの色

頼

誰かれの行てはいつこ前わたり

賢

三暮にけり色の露の春日影

同

御さきも忍ふ車あやしき

々

雨の名残のかすむかたより

賢

一方にきたむるとなき契にて

頼

跡なきは畑焼捨てけふりにて

頼

つれなきむくひ思へ後の世

々

あはれ雉子の巢によはふ声

賢

分くれは交野の真柴戦出

あられになりぬ道の行末

九重の空は三冬(カ)の閑にて

柳は木のめ春を待はな

柴此比の佐保の川風吹尽し

舟さす袖のあつきけぬめり

塩汲てはこふはおもき月の夜に

里遠かれや秋のやま本

霧こむる奥は水無瀬の物さひて

菊の香ほそき道のへの暮

名

陰に住松虫の音はかれ／＼に

戸さしの透ま霜や置らし

暁はよるの埋火消はてゝ

よはひのね覚わふるさむしろ

ならへつる枕や忍ぶそのむかし

二道ともにうらまるゝ中

夢に見はせめてうつゝを憐む

越行方は宇津のやまかけ

頼

賢

頼

賢

頼

賢

頼

賢

頼

賢

同

頼

同

賢

同

頼

同

賢

今日旅の宿りを月も教てよ

この世いとはむ露の隠家

いつまでか憂秋をへん宮つかへ

蓬かもとの心をそうつ

咲ぬへき春をとりの梅の花

北もこほらぬ岸のかたはら

ッ  
なへて日のめくる四町の池の面

翅をかはず鳥のいくむれ

呉竹の烟もなひく朝ほらけ

雲はふし見の山かせの末

けしき付雨や木幡の里ならん

しはし休らふ閑の駅路

立出し花の都のうき別

おしむもいつら春の行空

賢

頼

同

賢

同

頼

賢

同

頼

同

賢

同

頼

同

直賢 五十

直頼 五十

△作品（後）九▽

（書入）第四代光高公

陽広院殿御追善

独吟

短夜の夢のかたみや今朝の雲  
啼てむなしく行郭公

直頼

泊船浦山遠み漕出て

けふりにわかぬ松の一村

初雪やさらに降間もなあちさらんかるらん

寒きあらしの吹捨る空

さやかなる月の光もかき曇り

をくれ先達雁わたる声

ウ 荻の葉の末や小萩か本の露

軒も籬もふかき夕霧

なかれくる笥の水をせき留て

つくりもて行小田のかたはら

あれてさへたえぬは賤か草茸に

あるかなぎかのみちの一筋

小松天満宮北畠宮司家所蔵  
二光高時代連歌集二 (5)

哀今むかしをこふる和哥

外にかくれし跡したふ袖

ぬき置ける衣をたにと身にそへて

後のあしたのなみた露けし

吹絶る野分もかこつ虫の声

浅茅か陰の月のさひしさ

花ちれば玉の台も物かなし

鐘の響の霞む高樓

ニ 簾つるつりはのうこく春の雨

閑に過る道の小車

思ふ人つらき別と留よかし

あたに覚たる夢の程なさ

つかのまも都わすれぬかり枕

ねられはこそその袖の片敷

端居する比は扇を置やらて

夕の月や影うすき空

蟬の羽のぬれて鳴さす霧の内

木茂（マ）ささそな森の下露

分入は道かすかなる蓬生に

汲跡にこるいさら井の水

たえくんに雫落来る岩隠

春ともしらぬ松の戸の雪

ニッ  
山賤は花を垣にゆひなして

折のこされし梅の一本

踏かへて人もなき野の古道に

啼てをしかの入さかの奥

明かたや露に時雨のきほふらん

泪くはゝるきぬく月の月

まけしとのかたみの恨絶もせて

あはするからにてあこそわかれぬ

笛の音に琴の調への催れ

立まふ程の粧ひあやしき

老にける親をいたはる心しれ

隔たりつゝも住る長岡

陰ふかき草刈集め帰る野に

袖はあやめの香にふれぬめり

三 五月雨は軒の玉水絶やらて

露をつらぬくさかかの糸

七夕に手向する夜も明渡り

月幽かなるかさゝきのはし

しはなくや霞の内の村ちとり

風長閑なる志賀の海つら

唐崎や汀の水解そひて

朝気はかりの陰の霜(ママ)

移ろへる中に冬野の菊の花

山の南の日は閑なり

旅衣けふなら坂を越て来て

宇治の宿りを求よる袖

柴舟や暮過てしも帰らん

立重なれる浪の川霧

三ッ  
呉竹の煙に月の影澄て 消カ

焼火にまかふ蛩冷し

我玉やあこかれ出る胸中

かう引入てなみたなる袖

明果る鐘はたかしと別かね  
過行春のをしまるゝ友

花よしれ又あひみむもうき哀

宿になれたる老のうくひす

谷深み人も問来ぬ庵ふりて

とたえをわたす梯の雪

さし入は残れる寺の跡さひし

浦の難波のにし日すくなき

立登るもしほの煙むすほゝれ

吹過けらしまつかせのこゑ

名

桜はな散は若葉の露はかり

分る人なき布るの middle

神垣のおく遠くしも暮渡り

としのおはりに引みしめ繩

移るへき家ゐのかたのふたかりて

真木の戸くらき月の村霧

俄にもふりくる秋の雨涼し

聞はまちかきすゝむしのこゑ

小鷹かる袖は花野に分入て  
暮ふかめつゝ帰るさのみち

なきからを送り捨ての憂名残

ゆるす位の程はかしこき

時めくやつたなきにしもよらさらん

うらやまれぬる人のはらから

名ウ

捨てはもはかなきこそは落葉なれ

はなは朽そふ常盤木の陰

欄干の橋も霞にかたふきて

永日もやゝ限こそあれ

山鳥の尾上隔て声す也

かきたれつゝも雪に成空

春にまち秋にむかふを世の習ひ

植置松よ陰木高かれ

永原（赤座） 孝治作品抄

『当邦諸侍系図』（加越能文庫所蔵）に

永原土佐守孝治 七千石

実父越前二俣城主木村宗左衛門於濃州大垣討死。元和初年頃武州使役之刻、以御内意、改赤座称永原。後年隠居剃髮号如閑。嗜連歌名世聞。  
妻花山院左府定好公女。

『昌琢発句帳』に

加州 永原土州 上洛いそぎ下

国之刻所望当座

九重に千重まさるらん越の雪

と名を留める孝治は、脇田九兵衛直賢とともに、能順赴任以前に加賀連歌壇の中心人物であり、はやくは『白山万句』に慶長12年4月28日、赤座土佐守として山何百韻「待ほとや」一巻を由情なる人物と両吟で奉納している（資料三一六二V）。そのほか同書・藁草に収録した左記の三巻に出座している。

寛永21年3月17日 光高降誕夢想「開より」

明暦2年9月25日 勧請祈念か「松に菊」

明暦3年8月25日 於社頭始興行「千世の秋」

ここに紹介する独吟百韻四巻のうち、作者名を欠く二巻目以下をも孝治の作とすることためらいなしとしなが、正保二

年四月五日に歿した光高の側近に仕えた孝治の、一連の追善作品と推する他ないであろう。ちなみに、脇田九兵衛直賢の光高追善連歌としては「脇田如鉄家伝記」のなかに、

——予カナシミニ不堪。当座ニ上句ヲ設ケ、百韻独吟、

花はちりて日々になげきの茂り哉 直賢

一回忌十百韻ヲツ、リ影前ニ備奉ル、

花はあたのたとへ有けり去年の夢 直賢

〔以下九句、省略〕

と各発句が記録されている（『白山万句』△参考資料五V）。

△作品（後） 一〇V

小松天満宮北畠宮司家所蔵  
二光高時代連歌集二〇六

〔陽広院殿御追善〕

同 独 吟

郭公うき世かたらふ鳴ね哉

孝治

なかめむなしきみしか夜の月

橘はかほるむかしの宿にねて

軒吹風や夢さますらむ

戸さしまてあられ降入音寒み



なひき添たる竹の葉伝ひ

藪広く葛のかつらの所えて

色くしけきむしのこまく

ウ  
露ふれて行野の袖の秋涼し

夕かけさそふ月のしたかせ

里遠み松立奥に鐘なりて

舟あとさぎにかへる江の浪

一方は塩ひしほみつかたをなみ

おり居し田鶴も鳴渡空

真砂地の霜に朝日のさしはへて

冬も砌のきくのこるいろ

みとりなる陰浅からぬ竹垣に

夏としもいさまとのよこ風

白雨も時雨めぎつゝ山越て

北の岑より雲まよふ也

咲花に雁帰り行比良の海

のとかにあくる志賀の浦波

ニ  
海士舟も春しりかほに数みえて

こなたかなたにつゝく芦の屋

道かへてあら田も作そへけらし

めくるもちかくかよふやまかけ

跡したふなきか其日と守問て

よみおくりぬる哥のあわれさ

おもふ色も只むらさきのすり衣

見せはやと折つゆの萩か枝

初鷹の鳥柴を帰る家つとに

暮良寒き岳こえのみち

浦風に月は明石の浪よせて

須磨の磯辺は霧の降らし

松にのみそなれてまなき村時雨

残る紅葉もちりつくすかけ

ニウ  
さをしかも冬はふしとの音を絶て

里はなれなる山田さひしも

道分て入かた遠き三輪の奥

契りし人の跡とむるそて

名のらぬはそれとはしるもあやしみて

ひらきもやらすまもる関の戸

花はまた遅き木陰もかこひ籠

つもるをはらふ雪の梅つほ

鶯のねくらなからや羽吹らん

うつるひかりもさえかへる山

とけぬるも氷や月の深谷川

夕は霜をわたすかけはし

木枯を侘て猿啼岩の上

檜原も中にふかき松陰

三  
入会の鐘は雲より響来て

小倉の野への日はかすかなり

秋なから度々空や時雨るらん

翅つかれて雁のとふ声

冷しきあら海遠く吹あらし

月の夜舟の行多しられぬ

名残なく旅ねの夢は跡たえて

朝の雲や消つくすらむ

あはれむもいち立のほる夕煙

むかふ浅まのおちこちのやま

高萱も稍枯し野の末分て

かり場の犬の道はまかはぬ

しはし只たまると見しも薄雪に

外にはかはる九重のうち

三  
ウ  
ゆきかへる袖さへ花の色にして

春も時めく時にあふらし

今日毎に仰春日の神祭

道こそたえね大原のやま

夏までものこりて咲やつほ萱

野らと成けり人ふるすさと

けたものゝ常には見ぬも通来て

ひしりの君か御代そしらるゝ

伝るはもろこしよりのうつし絵に

別し跡のおもかけはうし

手枕にの夢をすさふる月澄て

なみたそへよと衣うつおと

身をわたる袖に菴もる秋の雨

透間吹入かせの草かき

名 外面にし鳴や冬野のきりくす

生るよもきのおれのこるかけ

朽木にも一枝花のほころひて

露の雫もかすむまにく

降としも空には見えぬ春の雨

立し雲雀のそことなきこゑ

明る野や目路より外に遠からん

月の上にし高きふしの根

田子の浦や舟引かたは霧晴て

浪にやきほふ沖の秋かせ

むらあしの花もちりつゝ乱ふし

稲葉にかゝるつゆふかき暮

帰り入いほりもの道の末ほそみ

つな引ぬるもをそぎうしろ手

あひ乗に車はしはし休らひて

宇治の宿りをいさなへる人

しりそくもしるて位やゆつらまし

翁さひしもこゝろたゞしき

瑞籬のあたり清めし宮司

みたらし川の水のすゞしき

誰か袖もけふは出つゝはらへして

かぎりもつらしぬくふち衣

△作品（後）一一▽

〔陽広院殿御追善〕

同 独 吟

世におしむ人によするや夏の月

夢かうつゝか鳴ほとゝぎす

盛見し花も散行春くれて

松かせさそふ藤かえのつゆ

霞より岩根をこゆる池の波

汀の氷とけてたゞよふ

つなきつる舟も綱手を引出て

小松天満宮北畠宮司家所蔵  
二光高時代連歌集二(7)

朝けしつげき竹の下道

ウ  
里つゝく田面の霜やけふるらん

岳へを遠みわたるかけはし

風ふるゝ袂すゝしき柳陰

軒飛かふ玉銚のすゑ

初秋の月も虫のねもほのかにて

夕霧なひくそのゝくさ村

誰見よとまねくや露の花すゝき

野へとひとしくなれる古跡

井の水もくまねはちりに埋て

おこなふ山も出て久しき

やつれたる法の衣のうらかなし

しのふ車ももるゝそての香

過行もそれとはしるき前わたり

吹笛竹や聞なれしこゑ

ニ  
事とふに猶哀そふ小野の奥

積れる雪をふみわくるみち

けふとてや摘もはつかなる初若菜

春なからまたさむぎ朝かせ

鶯の谷の戸出ぬ音を細み

霞みて山も日はかすかなり

明るより空や雨気に成ぬらし

鐘たえゝにひゝく遠かた

つれゝと齋の宮に籠居て

咲もしほれし花の朝かほ

なてしこの色一しほの秋の霜

きりゝすなく月のゆふかけ

分帰る袖は嵯峨野に休らひて

なき人をくる名残かなしきも

使来てすゝむるこそは位なれ

ひかしの国に世々をへてすむ

物云も只したゝめる声にして

ゆかりと名乗出るあやしき

いちしるくかりうつされしいきす玉

うらみの筋もさそなことはり

かならずと契もたかふたひゝに

あたるるに今なれて悔しき

年／＼にめつるも花は只しはし

春より後にさけるやまふき

陰ふかく入も長閑きよしの山

岑に霞めるあり明の月

幾つらか声して帰る天津雁

なきわたりつゝ広き江の水

三 見る／＼も波より波に雨はれて

芦の穂すへのつゆ白き暮

刈残す深田の稲葉乱ふし

ものわひしきの床しめてなく

此比のこゑあはれなり片鶉

野風身にしむ月の夜な／＼

妹おもふ旅ねかさねし草枕

衣かへすも夢は見えこぬ

たまさかの盟り計を限りにて

頼むたよりもはかな中川

立寄し木陰ももりて暑き日に

蟬鳴しきり暮やらぬ山

窓に吹軒の下風音たえて

雪こそうつめ庭の村竹

ミラ 鈎簾まけは秋さらて澄む空の月

目さましなるゝ夜長さもうし

かり／＼と我身いさむる音をそへて

松むしのなくよもきふの陰

露もまた霜にはならぬ夕／＼

山本遠き野原行みち

秣かひ帰るや里の方ならん

堤もわかす水けふるすゑ

川橋はいつよりたえてかた計

むかしなからの跡のあやなき

古人の記念の文は壁蟬さして

まことの親の行衛しるしも

御仏に花や手向てあふくらん

霞分こし小初瀬のやま

名 春の夜ははや明はつる鐘聞て

夢はかりなるあふせつらしも

難面さを只もてつくる恨しれ

誰かならはしにへたてぬる人

いはけなき程よりむすふえにしにて

近き隣に住なるゝそて

かしこくも入や学ひの道ならん

行末さそな君かうしろ見

狩はよりいさなひつゝも帰り来て

紅葉の枝を折かさすとも

いくそ度あたゝめ酒を酌かはし

月更るまでかたる古事

かそふるにあらましかはの猶そひて

おもひの玉をくりかへす袖

名ウ  
人まちてうたひしらふる琴の音に

よはひにけなく色めくも何

佛はそれと斗にかいま見て

木のもと遠く守る花の宿

梅かゝは霞むも風やつたゆらん

春の野筋のあくる明ほの

影しつむ淀の川瀬の月薄し

小舟も浪の露しほるそて

△作品(後) 一一一▽

〔陽広院殿御造善〕

同 独 吟

五月雨はおもなかりけり袖の露

古にし軒の草茂る陰

灯にまよふは窓のほたるにて

宵更るまで月遅き庭

暑さまた残りて風もたえくくに

散らぬ柳の木間行道

色にかつなひく田つらの水清て

むらのあはひの堤はるけし

ウ  
さし捨し小舟やなかけすまゝならん

小松天満宮北島宮司家所蔵  
二光高時代連歌集二(8)

方かへて取かけの山しは

谷の戸も南は雪の深からて

片枝冬木の梅や咲らむ

鶯のとしの内より来なく野に

籬にうつる朝日しつけき

呉竹の葉つたひけふる秋の霜

田中の霧間芥たくかけ

冷しく見えて風ふく芦葺に

月はむかしの難波津の跡

問よりし花にさひしき鐘聞て

けふの御法も過るきさらき

九重のや袖のとかにもあかれいて

つゝきにけりな道の小車

ニ  
暮る夜も光れる玉や妙ならん

いらかの軒の霞たはしる

陰高き松風寒み吹おちて

蔦の葉ふかくつもる岩かね

山水の声むせふらし霧の中

聞えつ絶つかしかなく也

月に成夕川のへの道涼し

袖にまちかくそよくむら竹

親さくる中はくるしきね覚して

あはれひとり床の手枕

夢にさへあひみぬこそはかなしけれ

むなしき跡のおもひいつまで

折／＼に宇治のやとりの事聞て

咲を待えし草の花その

ニラ  
秋来てや我はかほなる虫の声

霧に羽よはく胡蝶とふくれ

あらましき野分に露の散添て

紅葉の陰も月のさやけさ

夜たゝ汲酒の盃幾めくり

いはふ産屋にあつまれるそて

乱碁に人の心をうつしきて

暮つゝほしの澄る井の水

道たえて往来は見えぬ蓬生に

そのかみおもふたゝかひのには

契りしにおくれて長き恨しれ

かたみあやなきくろかみのすゑ

白露やはなの名残の柳陰

明る垣ほに晴し春さめ

三 里近き野へは霞の立籠て

鳴に雉子の床はしるしも

若草のかくれや深く成ぬらん

小沢も末は水のひきく

あらし置田面も賤か堀そへて

かよふ跡有岩かけのみち

問来つゝかなしむこそは塚の前

たのみもあたになせるにし木々

難面にかゝりし恨つきせめや

見し折しのふ花の朝顔

月も稍霧の籬にへたゝりて

秋(マ)に時 波の遠しま

左遷し憂身いさなへ雁の声

都のかたと詠やるそら

三ウ かり臥の夢の行衛の今朝の雲

ほとゝき過し音やしたふらん

松むしの鳴も冬野は幽にて

浅茅の霜に夕日かけろふ

枯てたつしの原分る道さひし

あらしの音も高円のやま

樓にしものそめは北にみねの雲

春も俄にゆきやちるらん

花に降雨より松もひゝき来て

うらゝかならぬかねは入あひ

別しにまさりて待はつらからし

契り置ても命いくつと

□らんもしらぬ此秋の月の友

いさ一夜ねん菊さけるやと

名 小鷹狩る袖も山路に行暮て

霧をわくれは露もふかけん

むすひよる野中の水はひやゝかに



おもぎやまひの心ちおこたる  
いむ事をうけてかざりやおorusらん  
いつしか酔もさめはつる人

朝市はしはし計に立すかり

からすむらかる里の遠近

風ませに竹の林は雪氣して

時雨て過し山本のくも

浪に入日は幽也三輪か崎

杉の木すゑにのほる月代

秋ふかき寒さをわふる猿鳴て

篠屋の外もさそな露霜

名ウ  
をくて田や今はた守も捨なまし

すゝき折ふすすへの細みち

崩そふ山の岸根の丸木橋

杣引残すなみの川よと

雨の後みなきる水の音たえて

生るをまゝの野への草村

ぬしもなき花見はやさぬ古郷に

霞むゆふへはあはれとりの音

△作品（後） 一三V

正保三年二月二十一日

独吟

消し世の記念やそれも夕霞

分る春野の露しほる袖

董摘道はるかにも帰り来て

入日かけろふ一むらのさと

舟は江に月待向ふ山高み

雲井にいつか聞ん雁か音

暮ぬれは蛩飛行秋の風

戸さしにならす袂涼しも

ウ  
呉竹のおほふ砌は浅からて

初雪なからたまる垣うち

山近き陰野は今朝もさゆる日に

小松天満宮北畠宮司家所蔵  
『光高時代連歌集』(9)

鳥もねくらを出かてのこゑ

花に来て名残を思ふかり枕

かすみくみつゝ明す友人

長閑なる月の夜塩や運らん

よる音遠し須磨のうら波

沖津舟たゆたふ風もたえく

山をへたてゝ霧まよふくれ

野辺に鳴男鹿もぬるゝ村時雨

紅葉かつちるもりの下かけ

道は只ふみ分かぬる草く

とふにあはれはふかき古宮

ニ  
跡たれし代々をそ語る神司

たえにしまつり又やおこさむ

みたれぬる国も今はたしつまりて

むなしきわかれなをしたふ袖

ことかはす程こそあらね夢の中

かきくらしたる心かなしも

思ひをもはるけかねぬる文にして

うしろめたきはあたなりし人

とひよるもうらめしかれや宇治の宿

さかり過行草のはな園

霜をいたみ虫なく声も幽にて

野寺の鐘や月にさひしき

暁のね覚におもふ身の向後

いつくもとめむあらましの山

ニ  
鷹の巢のあたりはふかき林にて

松かけかすむ磯の岩崎

暮はてゝ釣舟みえぬ春の波

風かはりてや雨になるらむ

笛の音の次くならず四の緒に

たつねよりての小野の山住

つれくゝと籠るもさそな室の内

限久しき法のおこなひ

物のけや更にはなれもやらさらむ

うらむるもけに秋になす人

立帰り又も扇とおくも何

詠わ□ □

さ夜風□ □出

梅か香□ □たれ

三 初蝶の我袖ち□ □来□

ほのかすむ野の道のかた□□

もえそふは水行末の草む□□

あら田をもかつ堀うむるあと

かへにける臥猪の床やしるからん

かつあらはにも枯し高かや

麓まで良雪そゝく浅間山

こりゐる雲に里わかぬくれ

郭公誰か待かたに過ぬらむ

まくらの夢もみしか夜の□

きぬくの名残と月をかた□ □

身にしめてうし□ □香

色なき□ □の花

さると□ □庭

三ッ あや□ □

柴とりくたす山のほそ道

梯は苔の岩ほの奥にして

明かたしるしかつらぎの雲

よそまでも咲や見ゆらん花盛

軒端の外も松の藤かえ

霞より籬吹こす風おちて

影おしまるゝ朝露の月

休らふや行ての末の野への宮

秋物かなしなくぎりくす

此比の夜寒の枕目もあはて

別れし人を思ふさむしろ

いつともうけてならへぬ床の上

難面こそはうき下の帯

名 只ならぬ身となる契りしれかし

かへる明石の浦はわひしも

霞たつ鳥かくれ行雁の声

波間に来つゝ燕なくなり

【以下空白】

浅井政右作品抄

既翻刻一覽 (略伝は「百川万句」五〇五頁に)

延宝3年8月 独吟「いつくもと」 △(白)一七V

(未詳) 独吟「初秋も」宗因点 △(白)一七V

延宝5年8月 宗因点「北野三吟」(筆録) △伝資料・その四V

延宝6年8月 元流・能順三吟、於山中 △(白)一八V

延宝9年9月10日 前田直忠家文台開 △(白)二一V

延宝9年9月 三六番前句附連哥合 △(中)九V

元禄4年7月 応信・武康等「下萩の」 △(前)九V

△作品(後)一四▽

小松天満宮北畠宮司家  
所蔵写本

(表紙)

政右千句独吟

何人 初春花 第一

春てふは花の種まく心かな

霞にそゝく雨の明ほの

鶯の声きく枕起出て

ひゝく戸ほそになひく呉竹

いつくより涼しき送る風ならん  
それとはなしに秋のたつ空

月は唯同じ光の夕く

色くにしもまよふ雲霧

ウ 見るまゝに山の木葉や散ぬらん

音さへさむき川浪のすゑ

水鳥の羽打かはす床べて

うこかぬ岩の陰そ閑けき

おしなへて君か御代をや仰くらん

今も絶せぬ敷島の道

袖はへて交加奈良の都人

にほひも八重に桜さく頃

山くは更に霞の内ならし

古郷いつこ帰る雁か音

旅に吾わするはかりの年をへて

若かりしたに老と成ぬる

大かたの世に愛るこそ月ならぬ

秋もなかはにうつり来にけり

ニ 聞馴て猶はたかなし萩の声

虫のいのちよあはれいつまで

此ころの朝夕霜も深き野に

遠山賤の道も絶にき

終に身の薪尽なん桑門

おもはさらめや法のことはり

心なき松にも風の音はして

見果ぬ夢そいともあたなる

一夜たに明しもやられてうき契

月の影をもしのふかよひ路

問よれば離も霧の古跡に

浅茅か末の露そこほるゝ

稲妻の空に仄めく暮涼し

うかふ曇に風は見えつゝ

ニウ 遙く／＼と入江の水は閑にて

其浦く／＼にかへるつり舟

芦の屋はいつれもおおなし海土の里

雪白妙に明る松原

山本の霞に暮々花ざかり

やとりに啼か春の百鳥

出る日のさす方分すうらゝにて

岩根の氷柱解てしたゝる

摘もまたわつかにもゆる初蕨

爪木もとむる道のかたはら

隠家の庵に帰る人見えて

月に心や墨そめの袖

置露もそれとおもひの玉のをに

秋のかさしはさそ龍田姫

三 遠方や雲も色つく三室山

夕もよほす小男鹿の声

さひしさはいつともあらぬ独ねに

懶き齡かきりしられす

にけなしや止ときもかな恋心

およはぬをしも思ひ初てき

何故にかゝる落葉を拾ひけん

哀烟をたつる山住

降つみて隙さへ見えぬ雪の中

春ともいはず氷る井の水

一方をかへさん頃もまたしくて

風まつ秋の小野ゝ葛原

月すまは声ふり出よきりくす

ねられぬまゝに長き夜の床

三テ

数くゝの思ひにそはる物おもひ

忍ふる中の子はいかゝせん

うき身をは無になしても惜からし

世にいくはくのゆかしけもある

遙なる昔を今にかへり見て

何か難波の夢の春風

一花に心とむる□いやはかな

うへてさくらの並木をも見ん

舟うかへ池水ひろく流しやり

遠きもさらにちかの塩かま

旅に其有しありさま語り出

いと珍しき夜半の手枕

詠する月や泪の隙ならん

秋をかなしむ侘人の宿

名  
露時雨わきて漏来る木の本に

道の小草もみちしにけり

鳴の立野沢の夕物さひし

あれたる田つら行人もなき

山涯は風吹おろし寒き日に

霰ちる也半天の雲

明ぬかと窓さしおほふ広柏

はしに寝ぬれは暑さわするゝ

月影も枕にちかくとふほたる

袖にもかゝる竹の葉の露

薜は手折まにくゝうつろひて

うすきなからもめくる秋の日

一重つゝかさねまほしきころも来ぬ

かるゝやななめ霜の草むら

名ウ  
遠き野ゝ所くゝに松生て

主はそれともしらぬ古塚

田の原や又ほり添て作るらん

ちまたになれる水の末く

奥山に一筋白き滝落て

峰よりみねに雲そよこたふ

花や唯楨の葉こしに遠からん

空ものとかに明る初瀬路

〔以下、各巻発句のみに省略〕

山 何 倂 花 第二

倂は花まで消な峰の雪

唐 何 待 花 第三

花またてうらやましさを帰雁

何 船 曙 花 第四

咲さかす唯曙や花の春

千 何 朝 花 第五

花のえに朝露伝ふ日影哉

三字中略 夕 花 第六

花の色に霞あひたる夕かな

何 風 月 花 第七

花さかり月も残らぬ夕かな

何 文 折 花 第八

見残すも手折も花の情かな

片 何 散 花 第九

散花に馴て習はぬ心かな

何 馬 残 花 第十

花に人こゝろみらるゝ青葉哉

〔以上、発句のみに省略〕

追 加

花 何

咲にけり思ひし物のはつ桜

霞も雨も今朝晴る山

あかねさす末野の雉子鳴出て

烟るまにくもゆる草村

沢水の流はるかに明はなれ

氷れる方は浪も音せぬ

月寒き芦辺村く枯立て

能 順

政 右

武 康

与 元

武 包

元 辰

正 供

風も冬木の梅匂ふ里

元流

享保乙卯閏月使人写之

佐永言

政右氏浅井名源右衛門号素庵

元禄四辛未某月帰泉

〔以上〕

### おことわり

校正の段階に入ってから、この部分に予定していた「能順作品抄」の出稿洩れに気がついた。元禄期後半の作品を主とし、そのなかには、三条西実教など霊元院歌壇人と能順との交流を示す作品も収められている。この分は他日の稿に割愛するのほかないが、本稿冒頭の口上がいつわりとなったことをお詫びします。



元胡（快全）作品抄

△作品（後）一四▽

元禄八年正月廿日

小松天満宮・北島宮司家所蔵、写本  
二快全・能願等百韻連歌集二

懐旧

昔とは只月霞む袂哉

哀春をや思ふ梅か香

雪深き谷の鶯仄めきて

また明果ぬ窓の閑けさ

竹の葉や涼しき戦残るらん

よせて汀の波そ帰れる

舟人の跡遠さかる夕日影

風や末／＼時雨行らん

ウ 白露のこほれ初たる真葛原

幽かに虫の音をそ催す

有明や更るまに／＼清からん

いかに忘れて打も寝なまし

元胡

移へる余所の手枕思ひやり

歎くたくひそ憐れぬれる

此君か賢かりける世に逢て

神のしるしもそれと見ゆらし

山本の杉立交り咲花に

明離るか霞引空

別行雁も塩路に誘れて

いつくともなく舟出をそする

有とのみ聞や蓬の鳥ならん

其魂ははかなかりけり

ニ 我身ともおもほえぬ計うかれ果

かこちかけしは実おをけなき

かゝる縁と成ぬるこそは枉しけれ

今の別の故を知すや

心もやとゝまらぬ夜半のさまならん

やとり侘たる風露の月

草隠なくや鶉の床の山

秋の砌の古て行らし

絶くの籬の水の寒けにて

入日影する竹の末く

杳かにも人こそ帰れ野への雁

烟とのみもなせる哀さ

玉章や取散さしと思ふらん

それとかはせる記念もそなき

ニッ  
後に又逢ともせぬ気色にて

さかなき心うらみ出ぬる

我からやいと世間うかるらん

浅茅生にして秋の夕暮

吹渡る嵐のまゝに擣碓

雁も鳴なる月のさやけさ

氷行江の水白く雪晴て

桀の雪雲のかたよりの空

入相くの声をやさして寺門

歩める袖の静なる道

露をさへ落さしとする花の枝

風の心も春の黄昏

霞にや猶垂籠て送らん

消し雲井の詠をそする

三  
明方の月の行こそ淋しけれ

末野の秋の鐘幽也

闍伽の具も草庵の露けくに

御名を唱てしほたる袖

身の上に積れる年を思取

有なは親のいかに倂

いと敷今黒髪の揚増り

逢見ん事の急かれそする

夜も更は語らふ程やなからまし

心のはしを先知せてん

其人にしたかふ物は教にて

朝の雪をふみ初る道

片岡や若菜摘へく成ぬらん

里はいつしか野にそ霞める

三ッ  
明る夜の春の仮寝を別来て

そほふる雨に思ひ暮しつ

待付て今こそ心おちぬれ

限り有てそ位定まる

仏迄いたらん程のさま／＼に

山を経て行奥の室の戸

夜を渡る月は木間のいかならん

夕の露の時雨初つる

秋の風此頃寒く覚えて

遠方人の上知まほし

と絶ぬる里は心を置ぬらし

うきになしけんふしもいふかし

程もなく散こそ花の色ならめ

藤やうら葉の露匂ふらん

名

霞むとはするも猶はた暮かねて

徒然なるそ過し侘たる

海顔や心をやれる住所

蟹人いつち松賀浦島

月高く藻塩の烟立消て

をと物凄き秋風の空

露降て木の下陰や暮ぬらん

庭の紅葉の乱てそ散

主もなき宿のさはこそ悲しけれ

とかめは人のをしたゝんやは

あはせたる心の程のしるかれや

見し夢よりの末頼らん

思ふにも始はかなき契にて

今身に前の世も知れぬる

名ヲ

手に取もあやしかりける玉なれや

やかて霰の消る篠原

日の色も冬野の小山暮行て

水しつまれる群鳥の声

岩波のかたへは淵の深みとり

柴橋過て松古き陰

花あらんそれそ我庵尋よれ

侘とも春の旅寝なりけり

八作品(後) 一六〇

元禄十三年三月五日 玉泉寺

天神宮法楽

山 何

桜花残すや春の手向草

風も結へる青柳の糸

薄霞朝霧白く雨見えて

夜渡る月の行衛閑けし

雁か音や枕の空を過ぬらん

戦も寒し軒の萩の葉

夕暮の霜絶く色付て

跡はるか也野辺の旅人

ウ 越し其嶺や白雲懸るらん

嵐に残る山本の声イ松

鳴鴉独さひしき入日影

舟指や誰遠方の水

深き夜の河瀬の浪に音立て

しけき浅茅の露の涼しさ

小松天満宮・北畠昌家所蔵、写本  
二快全・能順寺百韻連歌集二

快全

仄めきて虫や催す秋ならん  
暮なんとする月そいさよふ

思ひ侘霧の詠を尽し来て

歎に息も絶とたにしれ

哀ともいはずは経る世かひもなし

岩木に似たる心何そも

花の色に満るも有を苔衣

のほる霞や猶したふらん

ニ 跡先に春の河顔船指て

村く白き雪の山の端

冴く明行風の窓の竹

幾度小夜の寢覚をかせし

馴にける心や月も思ふらん

露も宿りも住はなれうき

色かほる筋をこめたる言葉に

今更いかにイなとかいとひ顔なる

時めける程はうき世をイに知やらて

命の際の悔なからめや

嬉しくも此春見つる花盛

若木はかなく植し梅か枝

傍は霞を頼む神垣に

隣とするも荒き山嵐

ニッ  
帰り来む年も今は空暮て

無人恋る夜半の哀さ

佛も夢の迷ひのさなからに

其あやまちを思ひつゝくる

古事の心おさなきくり通し

たはふれぬるもなつかしき友

おのつからもとの根さしは知かれや

来秋毎のイに菊咲る色

斯て我山路や月も契るらん

いと長き夜をかたしきの袖

惜つる別も今はむかしにて

生て有ふる思ひあやしき

行廻り逢むえにしや絶さらん

しはし沈める程な歎きそ

三  
とかくして身をは尽さん物なれや

打紛れつゝ今日も過しつ

乱碁やいかに心を移すらん

我花とのみ思ひあらそふ

鶯の人来と侘る声立て

深山の奥や春の隠家

爪木とリイ折て帰れる袖の夕霞み

雪□つゝもふり捨る道

有明の月や行らん野辺の末

杳に澄る水の秋風

陰浅く立る村声うら枯て

朽残りたる船の淋しさ

今は只其古琴イも声絶ぬ

心知にし人にあははや

三ッ  
通路のをほつかなきを如何せん

神の契りのためしもそ引

あふ夜半の明るをまゝに打侘て

行衛懸ねは泪落けり

有増も今はた老の顧みに

遠き歩そ休らはれぬる

色／＼の花野に心頭留りいれて

所得顔の露や置らん

荒けりと月も問来る草庵

野分の名残暮そ渡れる

仄なる梢や雲にこもるらん

瓦の軒端遠き山寺

入相の鐘しつまれる霜の声

いつちにけん道の辺の袖

名 其棲したふとするも儚しや

よそ人にしも見なさんほうき

誰故の物ともなきを我泪

秋の夕や思ひ付らん

妻恋る男鹿の心しらまほし

小萩花咲月清き比

枕には一村薄袖懸て

露を残せろいすか古郷の夢

今は只骸もとゝめす成跡に

響きさはかし宇治の川浪

暮深き嵐の内に鳴衝

そこはかとなく迷ひ行道

つたなくも心の有家アリカ定らて

山里住も思ふはかりそ

名ッ 来て見よと告むも遠き花陰

手折れる藤の色香そははや

なよひたる姿に春の唐衣

年重ねぬる人としもなし

いつまてか身は下なから過しらんし

月の都の詠をそする

其山と思ふも遠く霧晴て

木高く通よふ松の秋風

△作品 (後) 一七▽

(表紙)

十 梅 千 句

小松天満宮北畠宮司家所藏  
写本横一冊

いとけなき程より、此道に心はつくは山、このもかの  
もの陰分ならひ侍りしかと、蘭菊の色に心をよする  
も、いみしき道のさわりとかや。横川僧都のいましめ  
おかれ侍れば、其流をくみ、流の水を結ふ身となれる  
よりこのかた、すてわすれ侍れと、いにしへ春の夜の  
夢に、此神詠をもうけて、能順老人に申侍ければ、是  
を巻頭にて千句つくり侍ねかしと度々のすゝめに任せ  
て、終に見て侍りぬ。又此かたにていへは、伝教大師  
我たつ袖のことはをのへ給ひしより、浮世の民にお  
ほへる袖までも、和哥の浦風吹伝へて、世々の聖たち  
是をもて遊び侍ひしかすあくるにいとまなく、なかに  
つきて近き世には、十住心院僧都心敬都のかゝみとな  
り給ひしまゝに、其月のひかり今の世にもあほかすと  
いふ事なし。されはつたなきことの葉にを<sub>く</sub>かけまくも

かしこぎ聖廟の八百とせの春まち付、今法楽になすら  
ふる物ならし。

△注▽樽庵麦水の『三州奇談』は巻三の冒頭に「聖廟の夢想」と題し、この千句にまつわる△連歌咄し▽を伝えている。激励にかけつける岡島喜三郎 (元貴、はじめ元興) は父元為におとらぬ連歌好きで能順とも親しかった。

(朱別巻)「トキニ元禄壬午仲春下五日」

夢想第一

ことか中に梅かゝ嬉し神の春  
久しき年も立かへる空

快全

朝かゝみけふ若水の影見へて  
池の水やかすみ行らん

打戦き風吹渡る野辺の竹  
明残りたる月の寒けさ

軒廻る音や幾度時雨らん  
梢まはらに落葉しく陰

ウ 暮る日の山路を深み人もなし

むかふ行衛は峰の白雲

涼しさや南の風に通ふらん

渚のみるめ拾ひよらはや

あた波にぬらせる袖ははかなしな

うきもにくゝはあらぬあやしき

何により今はわすれぬふしならん

誓ひしものをことの葉の末

思ひやる古人遠く月を見て

小夜の寢覚の秋風の頃

露けさや雁の泪もとすらん

草の色こく成もこそゆけ

花はまたかつ／＼木茅<sup>コノメ</sup>春野ゝに

まつうちいてゝ霞わけまし

ニ 末も猶永／＼し日の旅の道

いのちしらねは別るゝそうぎ

かわるへき其心とはうたかはて

打解てしも見へし悔しき

黒髪の乱れなからはいかならし

いむことうけて閑にもか

今は唯終りも近くなれる身に

いたく更たる月はあはれむ

おもりつゝ散なんとする萩の露

人は問来ぬ秋のふるさと

夕暮のなとさひしさを誘ふらん

詠むる空は心もそなき

雨もたゝ待ぬる頃は晴ねかし

あふせたかふに身をも知るゝ

ニウ 我こそはまつ懸初し思ひなれ

うしとてさのみ世をなうらみそ

月花に馴つることも浅からず

心のあふそ雲の友なれ

笛には鳥も胡蝶も舎り来て

野辺のさかひもわかす成里

今朝見れば雪吹おろす山風に

遠さかれるか袖かすかなり

白波に唐舟のこぎ出て



身を尽してそ法は伝へし

いか計心のまよひ深からん

色めくかたの思ひをはせし

かりそめの故ならなくに此契

ともすれはなと憂になすらん

三

志いさめのすちにしたかはて

なくてそ親のさらに恋しき

打見れば棚引雲の空の月

村雨めける窓のした露

竹の葉のそゝろ寒けに風立て

末も荒野の暮ふかき道

行水の音やいつくに流るらん

生る浅茅か中の隠沼

横たわる松を橋なる門淋し

霜ふむ人も見へぬ山本

鳥の鳴冬田の入日仄かにて

枯たる陰の残る草むら

はかなしや誰しるしとて泊るらん

筆のすきひそ心あるへき

三

戯と思ひゆるさん物ならて

いはけなくとも世をは知らしや

おほやけや其後見に任すらん

富の緒川の古にける跡

朝露の名残の色もあやめ草

花うちかはる軒のたちはな

敬るまくらの月の移り来て

今はた時も秋のあかつき

哀さや鹿のなく音に小夜時雨

柴の戸さしの深き山中

おしなへていかに日吉の影ならん

みつから疊心もそうき

下水にちらても移れ花の色

風は柳の枝こそ(たづ)みめ

名 霞さへ夜の間の雨に朝しめり

驚いつく仄なるこゑ

あをとめて帰れる松を恨はや

暮る雲井に心かなしき

煙たに今は残らず成行て

松風すこき浦の筈の屋

月高く冴渡る秋の浪の音

沈む太谷の霧白きやま

色付る陰のかし鳥鳴落て

夕にうつる賤か一むら

降つみて雪しつまれる野路の末

うかへる雲や遠く行らん

あやしきは唯幻のわざにして

経ぬる此世のあはれいく程

名

うき事も思ひすてつゝ有ねかし

心置なはそふかひもなし

撰ふにはすぎたはめるもいかなれや

押はからるゝ人の言の葉

其陰は遠山産ツトの花を見て

都の春は限りなるころ

明ほのゝ空とや雁も別るらん

霞のすゑの沖のしら波

山何第二

梅かゝに朝霜けふる垣根哉

何船第三

夕露にしつまる梅の匂ひ哉

何人第四

梅か香に夜の花咲ね覚哉

花の何第五

竹さむく独梅さく春野哉

何路第六

雪の梅や匂ふかうへの作り枝

手何第七

梅かほる谷や水上春の水

一字露頭第八

鶯の此花咲る軒端かな

御何第九

〔以下、各巻発句のみ掲出〕

梅の色に心をよする柳かな

何心第十

梅かゝや今より世／＼の松の風

〔以上、発句のみ掲出〕

何色追加

写し見る心は花のかゝみ哉

月も幾春有明の空

鳴雁や山霞む江に馴ぬらん

残れる雪の峰遙也

立出る道の朝風寒き野に

枯たるすゝき仄かなる陰

撫子の色や芝生に匂ふらん

夕日こほるゝ露の涼しさ

南桂

其阿

正勝

定連

直景

政安

快全

丹端

△作品(後) 一八〇

小松天満宮・北島宮司家所蔵、写本  
〔能順・快全・欽生等連歌書留〕

懐旧

忍ぶ世やかゝれとてしも老の春

快全

ね覚哀に月霞む袖

松風の誘ふ梅かゝ仄めきて

薄雪晴るゝ野への遙けさ

末白き行山水や氷るらん

寒る夕の雲帰る跡

飛鳥の空になるかと幽にて

分る浅茅のうら枯の陰

ウ 秋風の行衛や霜も結ふらん

今より幾夜月の仮臥

古郷も夢路計は隔つなよ

恋しき人に逢ふよしもなし

物思ふ世には命も何ならて

折れる心神もあはれめ

花に猶鎮やらぬ風はうし

霞も露も共にはかなき

消にしか形見の春の夕間暮

野守の鐘の絶くゝの声

袖遠く爪木折てや帰るらん

峰の続きは白雲の中

松原の色濃紅葉こき交に

道は露けき門の淋しさ

ニ 時雨せし秋の朝氣の月落て

夢より後は身も冷にけり

はかなくもおそはれぬるやいかならん

心のなしによれる俤

今爰に弥陀の御国も遠からて

名をしも思へ住よしの岸

都より外に長居の浦はうし

いさりせんとはかけて知きや

ぬれ初し袖こそ人に悔しけれ

行衛たのまん心ともなし

経るにつけ苦しき事の増る世に

いかにつもれる庭の白雪

呉竹の夜深き嵐音寒み

只いたつらに伏見野の夢

ニッ  
伴ひし月も今はた隠ろひて

秋おしむらし松虫の啼

夕露の色もこほさし小萩原

此通ひ路を人やとかめん

終に我解ん心はあらなくに

恨のすゑやいかにならまし

永く只別果むも知かたみ

首途の今は物あわれ也

浅からすそふるや親の志

人となりしを思ひつゝくる

えにしあれは禽獸も聞法に

深きはやし奥の室の戸

入相の鐘なる花に人もなし

春のなかめの降しむる空

三  
いつしかに山は霞の隠し果

あかつき方の月の行末

別衣や露をは君もしほるらん

身にしむ思ひ似るへくもなし

形猶それならぬにはなくさまて

むかしに帰る齡ともかな

懈のかく悔しきをいかゝせん

とはぬ恨もことはりの友

栄ふるによるを時代の習ひにて

うつろひ行や花もうからん

衣のいろに藤山吹をとゝめはや

苔の袂は春の甲斐なき

其人の月日はかりは廻り来て

契し事のなとたかふらん

三ッ  
思はしよとはいひつるも忘かね

かく成にけるすく世恠しき

知さりし深山の里に身をは置

明日はいつくの旅寝をかせん

打むかひ馴るゝ心を月をも見よ

空もなつかしいにしへの跡

露の玉いかなる方にとまるらん

草木隈なく風吹ころ

冬にしも咲ける梅の一重垣

隣はかりに春そま近き

行帰りまとひし山路雪消て

谷の鶯ひとくとや啼

つれ／＼と柴の戸さしの霞日に

夕の色そ心あるへき

名  
待事は空も知るらん我思

浅き方にはうたかひなせり

様／＼に詫も仏の心にて

遠き後をもはかるあやしき

をのつから常なき身もや忘るらん

うき枕にそこゝろうこかす

立波のあやうかりける舟路にて

筑紫も今は遙なる跡

昔日や北野の社定むらん

生そふまゝに松そ木高き

夏深き草の端山の末懸て

忍ひに秋の風や吹らん

影するもいまた雲間の夕月夜

水闊き江の遠き雁かね

名ワ  
降雪の磯の隠に舟留て

戦めく中の芦屋寂しき

行人もあら田の片へ残る日に

イむ駒や誰はなつらん

問れぬるけはひも妬き舎にて

さたかにもなく名乗捨たる

かはかりの手向の花の一枝に

猶こそ思へ彼岸の春